

## 1 小・中学校における出席状況

小1から中3までの各学年の出席状況について、「休まなかった」「少し休んだ」「半分休んだ」「ほとんど休んだ」「すべて休んだ」の5つのいずれかで回答を求め、集計した。

図1～9は、学年ごとに出席状況をまとめたものである。また、図10～14は、5つの出席状況ごとに各学年の推移を示したものである。

小学校から中学校までの各学年における出席状況を見ると、学年が上がるごとに、「学校を休まなかった」と回答した者が減少している。

特に、小学校6年生から中学校1年生までの時期において、「休まなかった」と回答した者が1/3に減少し、半分以上学校を休んだ者が倍増している。このことから「中1ギャップ」の傾向を読み取ることができる。

また、小学校5年生から「休まなかった」人数が大きく減少し始め、「半分休んだ」「すべて休んだ」が増加する傾向も見られ、小学校高学年から不登校の兆候が現れ始めていることが分かる。

未然防止、早期対応の取組として、小学校高学年からの取組の必要性が読み取れる結果となった。

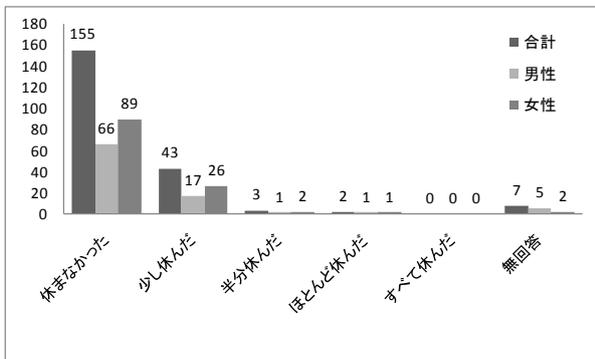


図1 小学校1年生時の出席状況 (n=209)

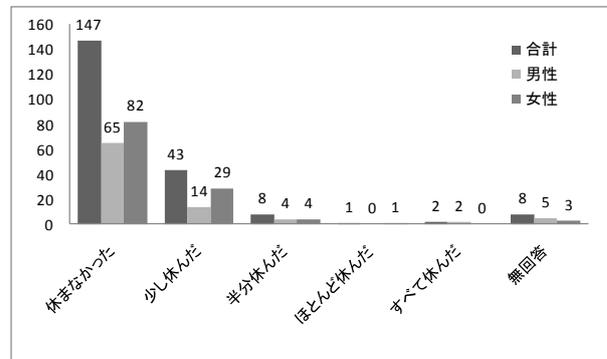


図2 小学校2年生時の出席状況 (n=209)

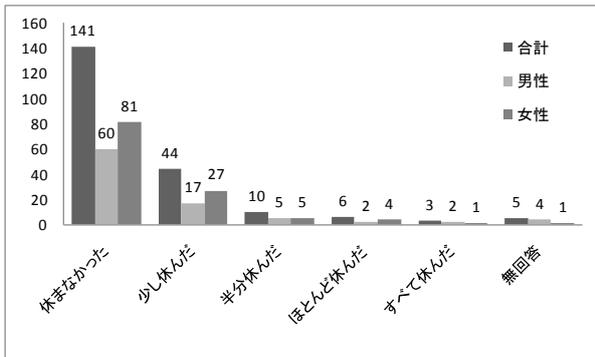


図3 小学校3年生時の出席状況 (n=209)

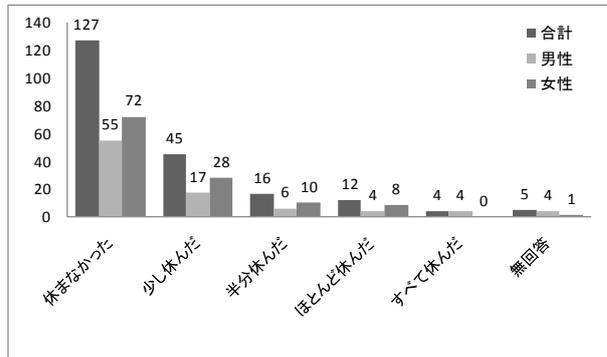


図4 小学校4年生時の出席状況 (n=209)

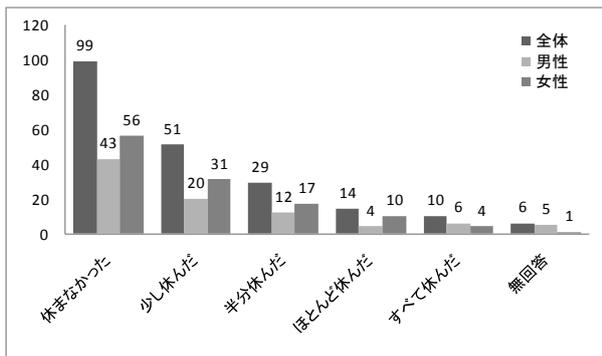


図5 小学校5年生時の出席状況 (n=209)

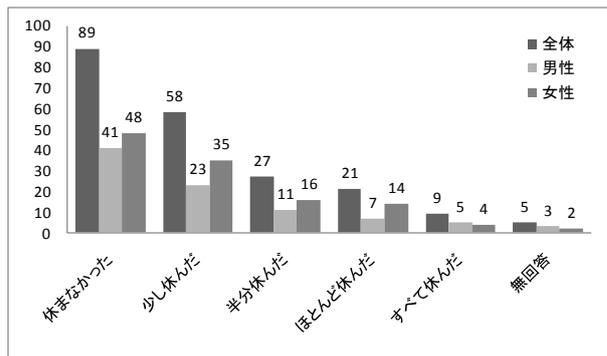


図6 小学校6年生時の出席状況 (n=209)

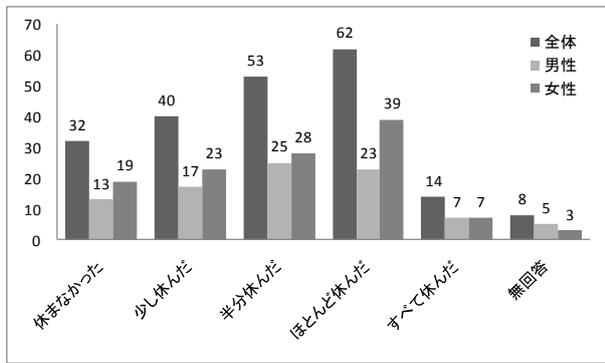


図7 中学校1年生時の出席状況 (n=209)

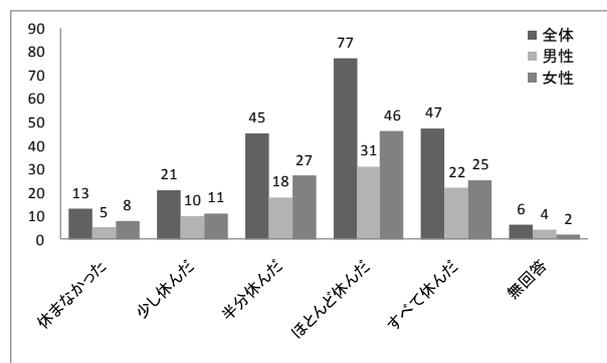


図8 中学校2年生時の出席状況 (n=209)

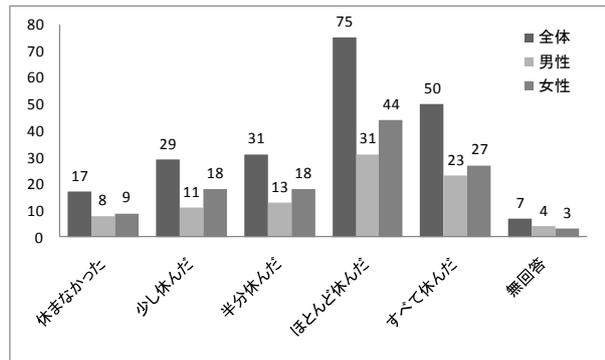


図9 中学校3年生時の出席状況 (n=209)

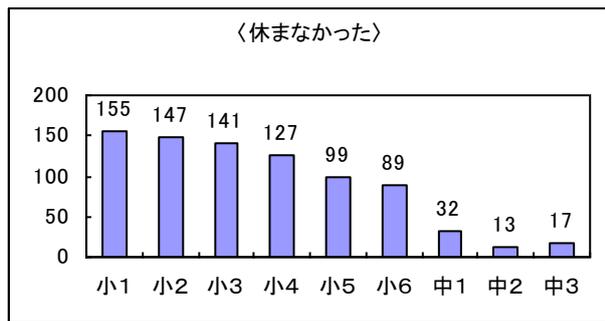


図10 「休まなかった」学年別状況 (n=209)

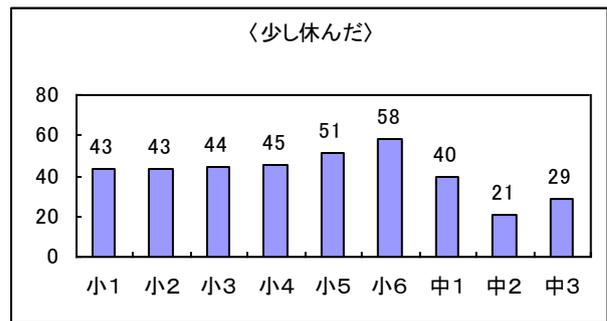


図11 「少し休んだ」学年別状況 (n=209)

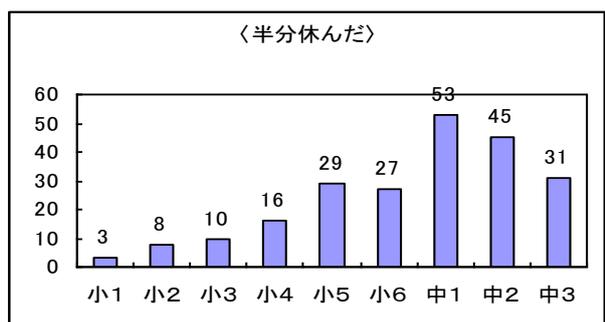


図12 「半分休んだ」学年別状況 (n=209)

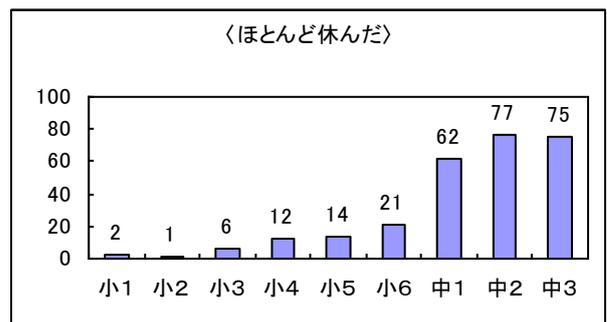


図13 「ほとんど休んだ」学年別状況 (n=209)

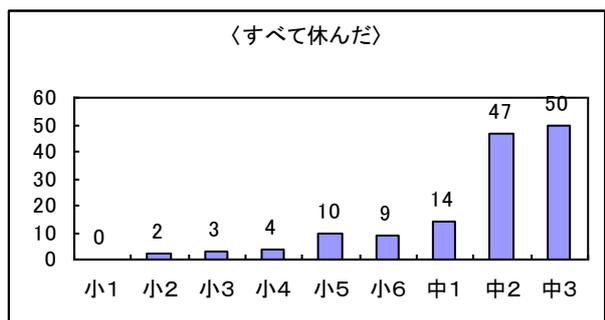


図14 「すべて休んだ」学年別状況 (n=209)

## 2 現在の状況に関すること

### (1) 外出状況の類型化

現在の外出状況について、「通常群」「準ひきこもり群」「ひきこもり群」の3つに類型化した。「通常群」は、仕事や学校、遊び等によく外出をしている者であり、「準ひきこもり群」は、普段は家にいるが趣味等の用事の時だけ外出する者、「ひきこもり群」は自室や家からほとんど出ない者である。

表 1 外出状況の類型

類 型	回答番号	回答内容
通常群	1	仕事や学校等で平日は毎日外出する
	2	仕事や学校等で週に3～4日は外出する
	3	遊び等で頻繁に外出する
	4	人付き合いのために、ときどき外出する (例：法事や結婚式など)
準ひきこもり群	5	普段は家にいるが、自分の趣味に関する用事の時だけ外出する
	6	普段は家にいるが、近所のコンビニなどには出かける
ひきこもり群	7	自室からは出るが、家からは出ない
	8	自室からほとんど出ない

### (2) 外出状況

「仕事や学校等で平日は毎日外出する」が63.3%で最も多く、「通常群」は77.2%を占めている。また、「準ひきこもり群」は16.2%あり、合わせて93.4%の者が何らかの形で外出し、他者とかかわっていることが分かる。

また、「自室からは出るが、家からは出ない」と「自室からはほとんど出ない」と回答した「ひきこもり群」が2.4%（5人）あり、その状態が3年以上も続いている者が1人いた。

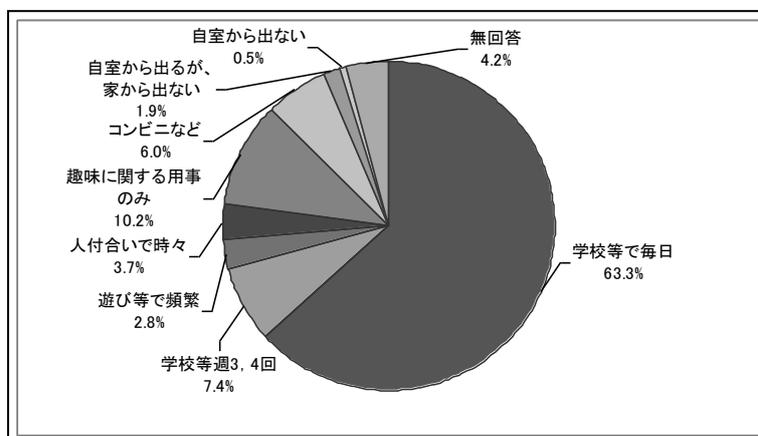


図 15 現在の外出状況 (回答別) (n=209)

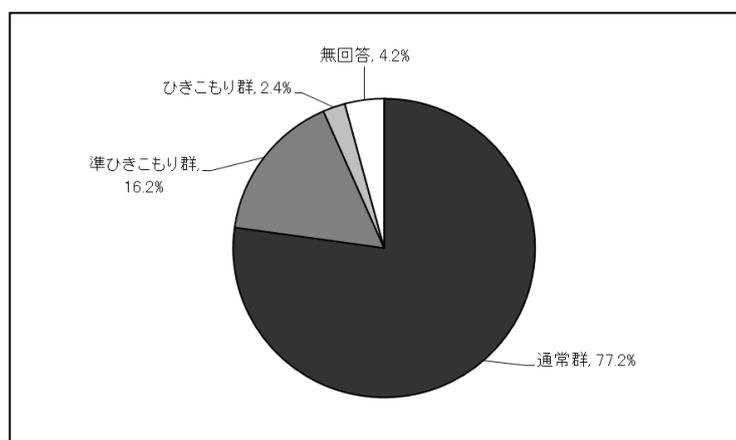


図 16 現在の外出状況 (類型別) (n=209)

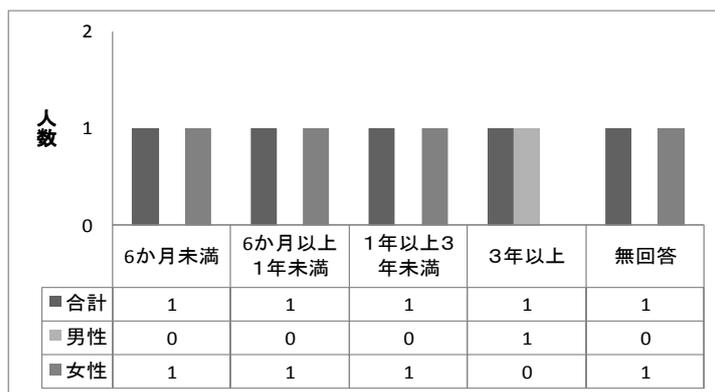


図17 家や自室から出ない状況になってからの期間 (n=5)

### (3) 現在の就学・就労等の状況

問7での「中学校卒業から現在までの履歴」から、現在の就学・就労等の状況について見ると、50.8%が就学しており、37.7%が就労している状況にある。現在「何もしていない」割合は11.6% (23人)であった。

就学状況と就労状況の内訳は、図19・図20に示すとおりである。

現在の就労状況の内訳を見ると、「パートやアルバイトをしている」が48.0%で最も多く、「正社員として会社などで働いている」に比べ、高い割合になっている。このことは、今後の生活において必要とする支援として「自立して生活するための支援」や「技術や技能の習得についての手助け」を男性が多く選んでいることと結びつく(図61)。

こうした状況は、現在不登校となり、将来に見通しが持てないままに不安になったり、現実逃避をしたりする傾向にある子どもたちに対して、現実的に話をすることで将来について考え合ったり、今何に取り組むことが必要なのか話し合い、目標を持たせる上で有効な資料であると言える。また、保護者とともに将来を見据えた家庭でのかかわりを考え合ったり、保護者の変容を促したりするための資料として活用できる。

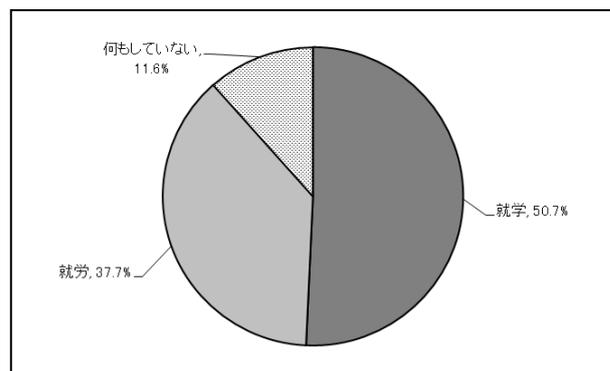


図18 現在の就学・就労の状況 (n=199)

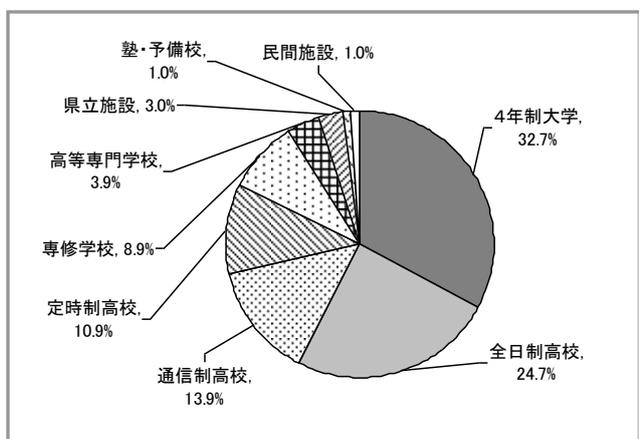


図19 現在の就学状況の内訳 (n=101)

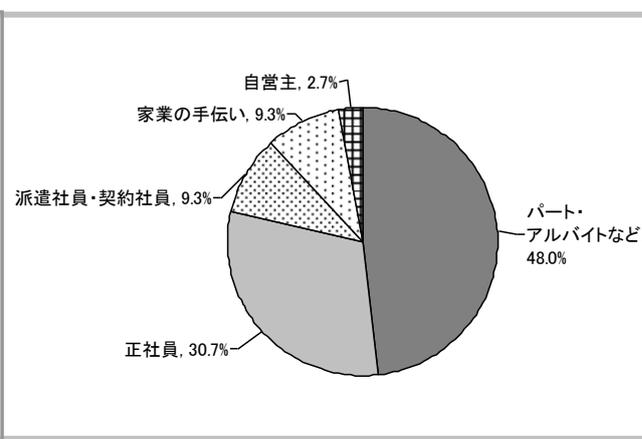


図20 現在の就労状況の内訳 (n=75)

#### (4) 小・中学校における出席状況と現在の外出状況との関連について

図 21～図 29 は、現在の外出状況の「通常群」「準ひきこもり群」「ひきこもり群」の各類型に該当する者が、小1～中3の各学年においてどのような出席状況であったかを示したものである。

また、表 2 は、現在の外出状況と各学年の出席状況との関連性を見た結果である。

これらの資料から、「小学校 5 年生」「小学校 6 年生」「中学校 1 年生」において、次のような特徴を見つけることができる。

- ・小学校 5 年生において「半分くらい休んだ者」には「ひきこもり群」が多く、「すべて休んだ者」には「準ひきこもり群」が多かった。一方、「すべて休んだ者」や「半分くらい休んだ者」には、「通常群」が少なかった。
- ・小学校 6 年生において「すべて休んだ者」には、「ひきこもり群」が多く、逆に「通常群」が少なかった。
- ・中学校 1 年生において「すべて休んだ者」には、「準ひきこもり群」と「ひきこもり群」が多く、「通常群」が少なかった。

つまり、この 3 学年を通して、「通常群」にはすべて休んだ者が少なく、「準ひきこもり群」と「ひきこもり群」には「すべて休んだ者」が多いことが分かった。

このことから、将来の「準ひきこもり群」や「ひきこもり群」を減少させるためには、学校での別室登校や時間帯を設けた部分登校、適応教室や但馬やまびこの郷の利用等により、学校と何らかの形でつながっておく（全欠にはしない）方策が必要なのではないかと言える。

そのためにも、小学校高学年から中 1 までの間における早期対応、家庭訪問等の働きかけ、小中連携といった取組のさらなる工夫が求められていると言える。また、子どもを支える上で保護者は最も重要なキーパーソンである。相談を通して保護者の思いを受容し、信頼関係を築きながら、学校に対するプラスの印象や登校規範を高めたり、保護者自身の社会性を育むためのワークショップ等への参加を促したり、子どもへのかかわり方をともに考え合ったりすることにより、保護者の変容を促すことも、不登校を長期化させない重要な働きかけであろう。

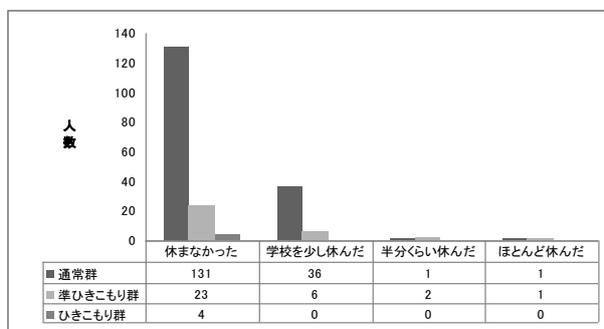


図 21 小学校 1 年生時の出席状況 (n=209)

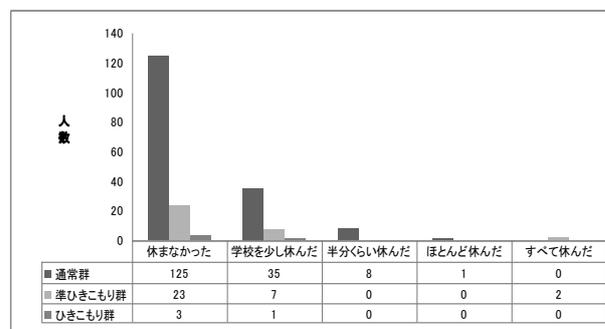


図 22 小学校 2 年生時の出席状況 (n=209)

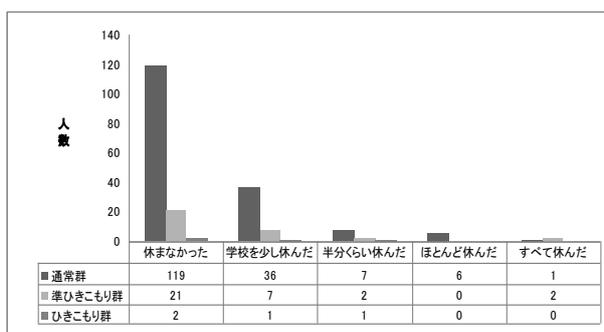


図 23 小学校 3 年生時の出席状況 (n=209)

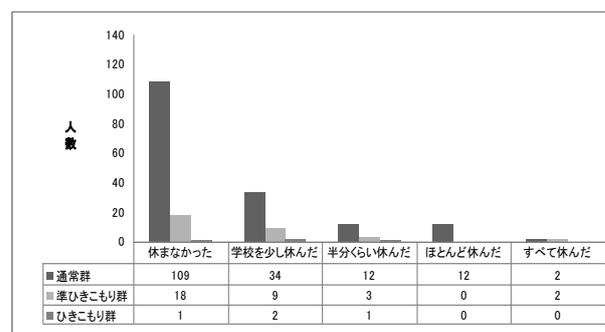


図 24 小学校 4 年生時の出席状況 (n=209)

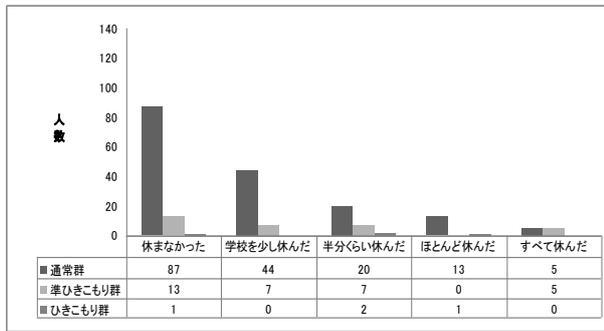


図 25 小学校 5 年生時の出席状況 (n=209)

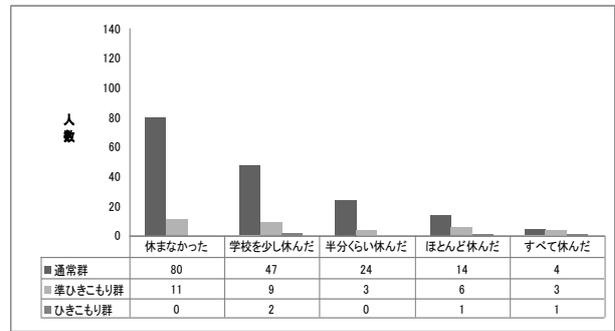


図 26 小学校 6 年生時の出席状況 (n=209)

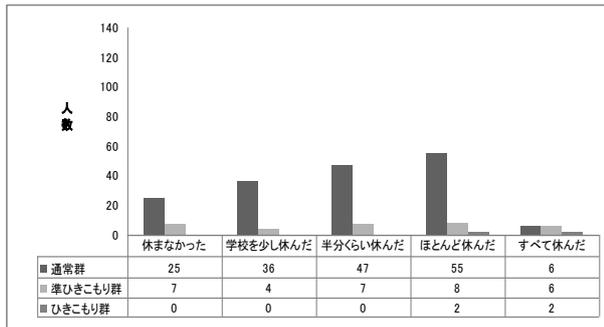


図 27 中学校 1 年生時の出席状況 (n=209)

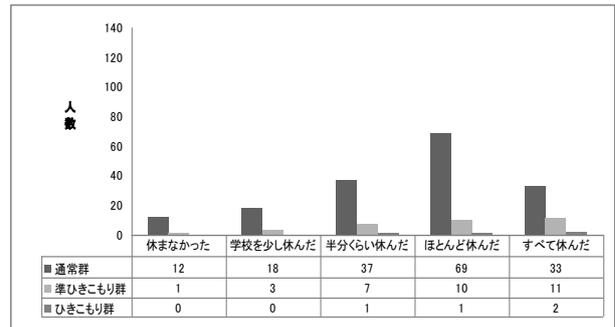


図 28 中学校 2 年生時の出席状況 (n=209)

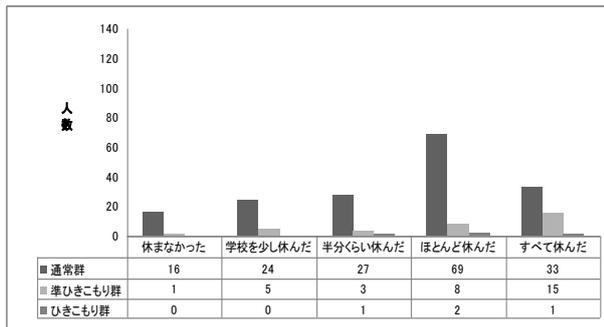


図 29 中学校 3 年生時の出席状況 (n=209)

表 2 現在の外出状況と小学校から中学校までの出席状態との関連性 (n=205)

質問項目	内容	χ <sup>2</sup> 値	自由度	検定結果	CramerのV係数	選択項目	調整済み残差		
							通常群	準ひきこもり	ひきこもり
小学校から中学校までの出席状態	「小学校5年生」	21.310	8	**	0.228	休まなかった	1.4	-1.1	-1.0
						少し休んだ	0.8	-0.4	-1.2
						半分くらい休んだ	-2.1	1.4	2.1
						ほとんど休んだ	1.1	-1.7	1.5
						すべて休んだ	-2.8	3.1	-0.5
小学校から中学校までの出席状態	「小学生6年生」	16.306	8	*	0.199	休まなかった	1.8	-1.2	-1.8
						少し休んだ	-0.3	0.0	1.0
						半分くらい休んだ	0.9	-0.7	-0.8
						ほとんど休んだ	-2.0	1.7	1.0
						すべて休んだ	-2.5	1.7	2.2
小学校から中学校までの出席状態	「中学生1年生」	25.949	8	***	0.252	休まなかった	-0.7	1.1	-0.9
						少し休んだ	1.4	-1.1	-1.0
						半分くらい休んだ	1.0	-0.6	-1.2
						ほとんど休んだ	0.6	-0.9	0.8
						すべて休んだ	-4.0	2.9	3.5

\*\*\* : p<0.001, \*\* : p<0.01, \* : p<0.05

### 3 学校を休み始めたきっかけについて

学校を休み始めたきっかけについては、図 30 のように、「いじめ」「友人との関係（いじめを除く）」によるものが突出して多く、続いて「学校の先生との関係」「クラブや部活動での問題」が挙げられており、学校生活における人間関係を要因とするものが上位を占めている。現在就学も就労もしていない者を抽出した結果を見ても、その要因は同様の傾向が見られる。

この傾向は、逆に言えば、こうした人間関係を要因とする不登校児童生徒が当所をよく利用しているとも言える。当所の利用を通じて「一番印象に残っていること」や「一番安心できた人」として最も多く「友だち」を挙げていることから、当所の利用を通じて人間関係の再構築を図ろうとしていることが分かる。

こうした要因による不登校への早期対応として、当所の利用を促すことや、その未然防止として、学校生活における人間関係についての児童生徒との日常的な相談体制の確立や、ピア・サポート等の取組が重要であることが分かる。

ただ、今もなお、不登校になったきっかけが「分からない」という回答が一定数あり、年月を経ても整理できていない状況を読み取ることができる。またこれが男性よりも女性に多いことも興味深い結果であり、本人の気持ちを受容しながら話し合うことにより、本人の気持ちの整理を少しずつ図っていく働きかけが必要であると言える。

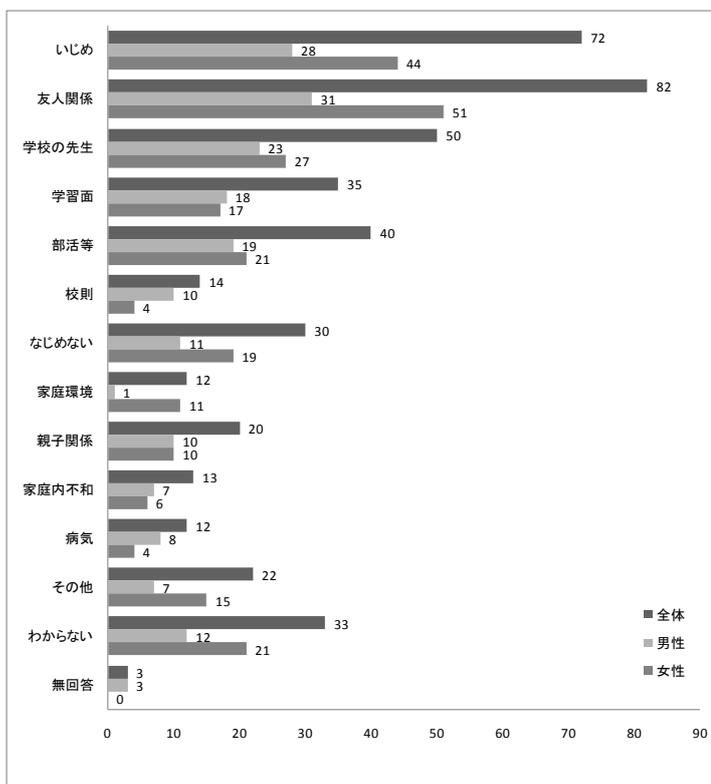


図 30 学校を休み始めた直接のきっかけ (n=209)

### 4 中学校卒業後から現在までの履歴に関すること

#### (1) 中学校卒業後の1年間について

高校、県立施設や民間のフリースクール等に就学した者が 94.5%を占めている。当所を利用する中学3年生の3学期における様子を踏まえても、進学という環境の変化や新たな人間関係づくりへの期待感をもって進学をしたことが推察される。

なお、進学先の内訳を見ると、全日制高校が 55.1%と最も多く、次いで定時制高校が 19.9%、通信制高校が 19.3%と、ほぼ同率で続いている。

一方、パートやアルバイトをしていた者が 1.5%、何もしていない者が 4.0%あった。特に、何もしていない者がいる現実、大きく受け止めなければいけない結果である。特にその状態が中学校卒業後から数年にわたって続いている者もあり、当所での体験をふり返り「当所での活動や働きかけなどへの要望」として「継続的な働きかけのシステム」について記述があることから、中学校卒業までの支援体制と中学校卒業後の支援体制との円滑なつながりが求められていると言える。

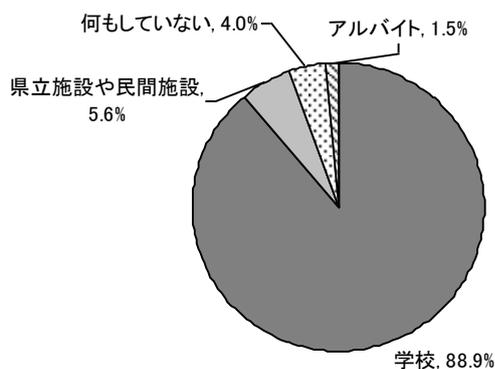


図 31 中学校卒業後の状況 (n=198)

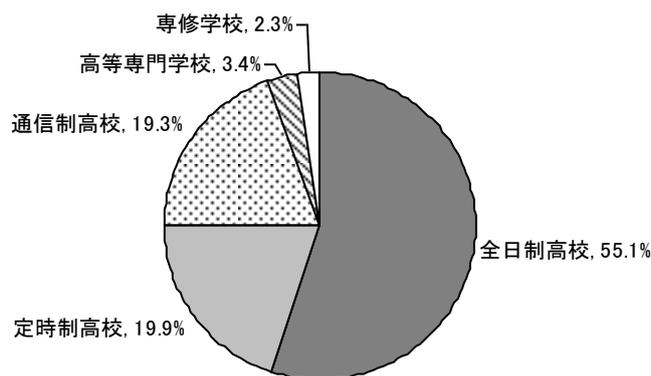


図 32 中学校卒業後の高校等への進学状況 (n=187)

## (2) 高校等の学校の中途退学について

### ア 中途退学した学校とその時の年齢

中学校卒業後から現在までの状況を見ると、高校へ進学したものの、中途退学した者は 41 人を数える。

表 3 を見ると、全日制高校を高校 1 年生 (15 歳から 16 歳にかけて) の時に中途退学した者が 11 人で最も多く、次いで全日制高校を高校 2 年生 (16 歳から 17 歳にかけて) の時に中途退学した者が 8 人で多かった。

また、年齢別で見ると、15 歳から 16 歳にかけて高校を中途退学した者が 17 人で最も多く、次いで 16 歳から 17 歳にかけての高校を中途退学した者が 10 人であり、高 1 (あるいは高 2) まで就学が続かない状況が見られる。

### イ 中途退学以降について

表 4 から中途退学直後の状況を見てみると、通信制高校が最も多く (9 人)、神出学園等の県立施設に通う者 (6 人)、パートやアルバイトに従事する者 (6 人) がある一方で、何もしていないと回答した者 (8 人) が、ほぼ同数であった。

表 5 から中途退学経験者の「現在していること」について見ると、「何もしていない」が 10 人で最も多かった。その現在の外出状況について調べてみると、「通常群」が 3 人、「準ひきこもり群」が 7 人、「ひきこもり群」が 1 人という結果も出ている。

また、表 6 において、高校を中途退学した直後「何もしていない」と回答した者で、何もしていない期間の長さや現在の状況について見ると、何もしていない時期の長さも様々で、現在は何もしていないだけで、以前はパートやアルバイトに従事したりしている者もあり、全員が何もしていないわけではないことが分かる。

環境や気持ちなどの変化により進学するきっかけをつかんでも、何らかの問題で中途退学してしまう者とそうでない者がいることが明らかになったが、その違いは何によるものなのかについては明らかにすることができなかった。

中途退学するきっかけやその時に必要とした支援の内容、その有無などを明らかにし、支援の在り方を考えていく必要がある。また、高校を中途退学してから現在まで何もしていない者や現在何もしていない者の両者に共通する要因や、必要としている支援について明らかにし、具体的な支援の方法を検討する必要があると考える。

表3 中途退学した学校と年齢 (n=41)

中退した学校	15-16歳	16-17歳	17-18歳	18-19歳	19-20歳	20-21歳
全日制高校	11	8	2	1	0	0
定時制高校	1	0	1	1	0	0
通信制高校	1	1	4	1	0	1
高等専門学校	1	0	0	1	0	0
不明	3	1	1	1	1	0
合計	17	10	8	5	1	1

表4 中途退学した直後にしていたことについて (n=41)

高校中退後にしたこと	人数
通信制高校に通っていた	9
四年制大学に通っている	1
進学塾等に通っていた	1
高卒認定を受けた(ようとしていた)	1
県立神出学園等の県立施設に通っていた	6
正社員として会社などで働いている	1
パートやアルバイトをしていた	6
家業を手伝っていた	2
何もしていない	8
不明	6
合計	41

表5 現在していることについて (n=41)

現在していること	人数
通信制高校に通っている	3
四年制大学に通っている	3
高卒認定を受ける(ようとしている)	1
県立神出学園等の県立施設に通っている	1
民間施設に通っている	1
正社員として会社などで働いている	4
派遣社員・契約社員として働いている	1
パートやアルバイトをしている	4
家業を手伝っている	5
何もしていない	10
不明	8
合計	41

表6 高校を中途退学してから次のことをするまでの期間と現在していること (n=8)

	中退して1年未満から1年		中退して1年以上から2年未満		中退して2年以上から3年未満		中退して4年以上から5年未満		中退して5年以上	
	現在の状況	人数	現在の状況	人数	現在の状況	人数	現在の状況	人数	現在の状況	人数
全日制高校中退	家業を手伝っている	1	不明	1	何もしていない	1	何もしていない	1		
			通信制高校に通っている	1						
			通信制高校と民間施設に通っている	1						
定時制高校中退	何もしていない	1								
通信制高校中退									家業を手伝っている	1
合計		2		3		1		1		1

(3) 現在、何もしていない(いなかった)状況について

図33のように、現在何もしていない者と過去に何もしていなかった期間を持つ者は、合わせて42人であった。

過去に何もしていなかった期間を持つ者の現在の状況については、図34に示すとおりであるが、その中で最も多いのがパートやアルバイトをしている者であり、そのうち、中学校卒業後何もしていない数年間を経てパートやアルバイトを始めた者や、中途退学後から数年にわたりパートやアルバイトを繰り返している実情も見られた。

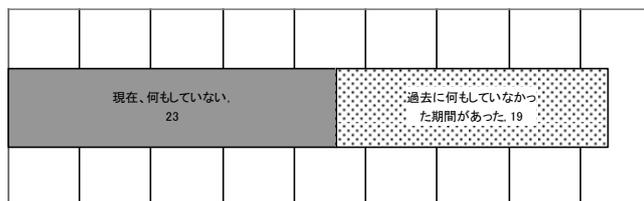


図33 現在何もしていない者及び過去に何もしていなかった期間を持つ者 (n=42)

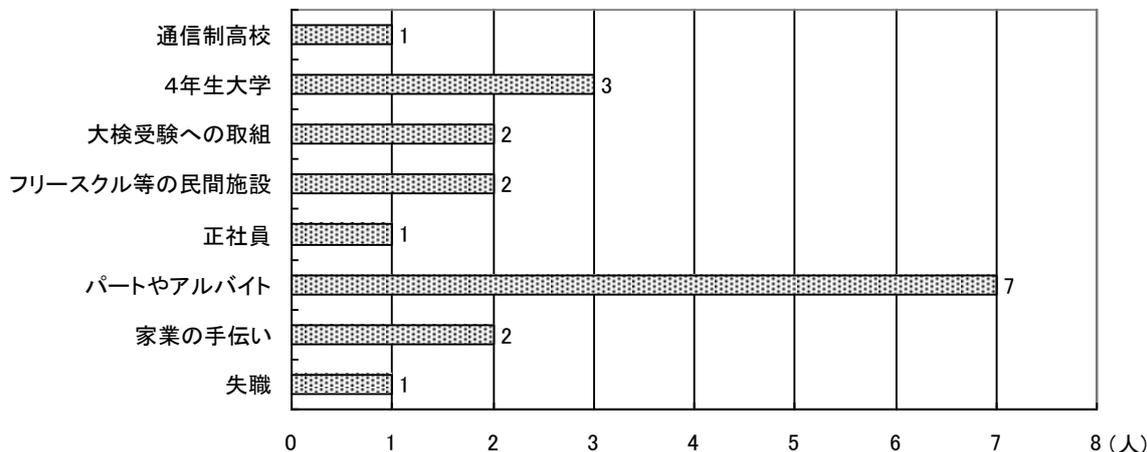


図34 過去に何もしていなかった期間がある者の現在の状況 (n=19)

表7は、現在何もしていない者(23人)の中学校卒業後の履歴についてまとめたものである。

不登校になったきっかけとしては、「いじめ」「友人との関係」「学校の先生との関係」といった学校生活での人間関係を要因とするものが目立つ。欠席した時期も、中学校よりも小学校において始まっている場合が多いことが分かる。特に小1の段階ですでに始まっている者もいる。

図35を見ると、登校できなかつた時期に必要なとした支援は、「適応教室など、継続的に通えるような施設や関係機関の紹介」が最も多く、次いで「学習指導」が続いている。登校できない時期が長期化する中、日常的に同世代の児童生徒との交流や学習の補充等が可能な適応教室への通級を望んでいたことが分かる。

また、現在何もしていない理由については、図36にあるように、「心の病」が最も多く、次いで「人間関係に自信がない」が続いている。「心の病」がどのような状態なのか、本調査で明らかにすることはできなかったが、当時、当所以外に利用していた施設や機関を見ると、「公立の相談機関」「病院・診療所」「保健所・保健センター」が多く挙がっており、不登校であった時期から、今もなおそのことで苦しんでいる状態を窺うことができる。

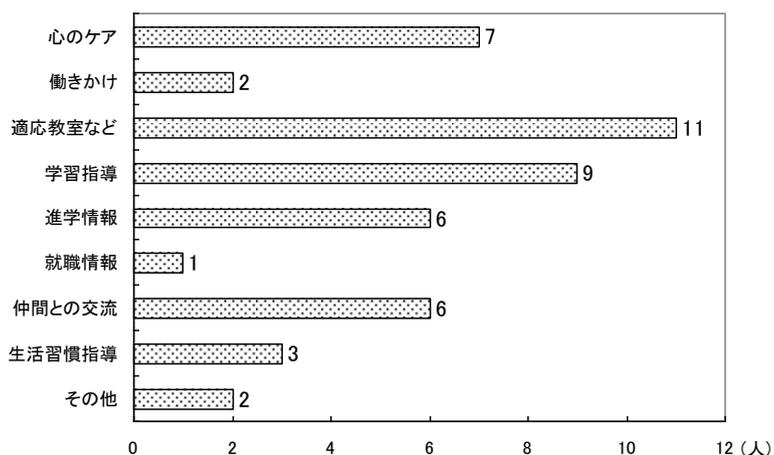


図35 登校できなかつた時期に必要なとした支援 (n=23)  
※ 現在何もしていない者

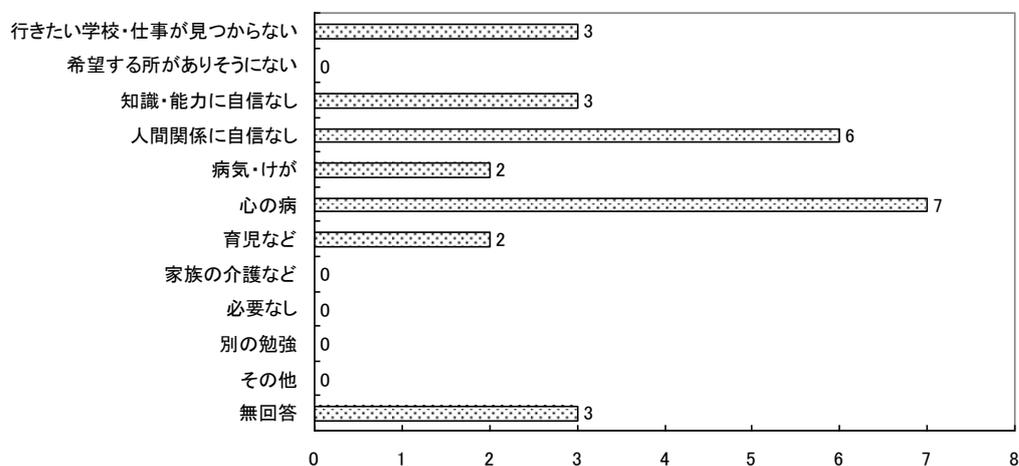


図36 現在何もしていない理由 (n=23)

表7 現在何もしていない者の中学校卒業後からの履歴(n=23)

年齢	性別	欠席し始めた時期	不登校のきっかけ	当所以外の利用施設・機関	必要とした支援	中学校卒業後からの履歴	現在何もしていない理由	外出状況	これから望む支援
18	男	小4~	友人との関係	・適応教室	・適応教室等	15歳(定時制)(アルバイト)→ 16歳(定時制)→ 17歳(定時制)(中退)→ 以後、何もしていない	人間関係に自信がない	準引きこもり群	・就職に関する情報提供や相談
18	女	小1~	いじめ ・学校の先生との関係	・公立の相談機関 ・その他(SC)	・適応教室等	15歳から何もしていない	人間関係に自信がない	準引きこもり群	・心のケア ・学習の手助け
18	女	小4~	友人との関係 ・周りになじめない ・病気のため	病院・診療所	・学習指導	15歳(全日制)→16歳(全日制)→ 18歳(全日制) 以後、何もしていない	・学校や仕事が見つからない	準引きこもり群	・就職に関する情報提供や相談 ・技術や技能の習得の手助け
18	女	小5~	いじめ	・民間機関	・心のケア ・登校に向けた働きかけや手立て ・施設や関係機関の紹介 ・学習指導 ・進学の情報提供や相談 ・就職に関する情報提供や相談	15歳(高等専門学校)→ 16歳(高等専門学校)→ 17歳(高等専門学校) 以後、何もしていない	・知識・能力に自信がない ・人間関係に自信がない ・身体的な病気、けがのため	準引きこもり群	・心のケア ・支援機関の紹介 ・進学に関する情報提供や相談 ・就職に関する情報提供や相談 ・学習の手助け ・規則正しい生活習慣の指導 ・自立して生活する手助け ・技術や技能の習得の手助け ・経済的援助に関する情報提供や相談 ・社会的・一般常識を身につける手助け ・人間関係づくりのための手助け ・同世代の仲間との交流
19	女	小1~	いじめ ・学校の先生との関係 ・学校のきまり ・その他 ・わからない	・適応教室 ・病院、診療所 ・その他(SC)	・その他(感情を認め安心する場所)	15歳から何もしていない	・身体的な病気、けがのため ・心の病のため ・学校以外で勉強	準引きこもり群	・心のケア ・同世代の仲間との交流
19	女	小3~	友人との関係 ・学校の先生との関係 ・学習の問題	・適応教室 ・公立の相談機関	・心のケア ・適応教室等	15~16歳退学→17~18歳退職→ 以後何もしていない		準引きこもり群	
21	女	中1~	友人との関係	福祉機関	・登校に向けた働きかけや手立て ・学習指導 ・仲間との交流	15歳 パートやアルバイト→ 以後何もしていない	育児などのため学校や仕事を続けられそうにない	通常群	・心のケア ・支援機関の紹介 ・規則正しい生活習慣の指導 ・自立して生活するための手助け ・人間関係づくりのための手助け
21	女	小2~	分からない	・公立の相談機関 ・民間施設	・心のケア ・学習指導 ・生活習慣の指導	15歳(通信制)→ 16歳(通信制)→ 17歳(通信制)→ 以後、何もしていない	知識・能力に自信がない	通常群	・支援機関の紹介 ・規則正しい生活習慣の指導 ・自立して生活するための手助け ・社会的・一般常識を身につける手助け ・人間関係づくりのための手助け
21	女	小5~	分からない	適応教室	・心のケア ・その他	15歳(全日制)→ 16歳(全日制)→ 17歳(全日制)→ 18歳(専修学校)→ 19歳(専修学校)→ 20歳(パート)→以降何もしていない	学校や仕事が見つからなかった	通常群	特になし
23	女	小6~	いじめ ・クラブ・部活動での問題	民間施設	・学習指導 ・進学の情報提供や相談 ・生活習慣の指導	15歳(全日制)→16歳(全日制)→17歳(中退)→ 以後、何もしていない	・知識・能力に自信がない ・人間関係に自信がない	準引きこもり群	・自立して生活する手助け ・技術や技能の習得の手助け ・社会的・一般常識を身につける手助け ・人間関係づくりのための手助け
23	男	小1~	分からない	・適応教室 ・保健所、保健センター ・病院、診療所	・適応教室等 ・仲間との交流	15歳(全日制)→16歳(パートやアルバイト)→ 17~22歳(通信制)→パートやアルバイト→ 23歳(中退)→パート等やめる→ 以後、何もしていない	心の病のため	通常群	自立して生活する手助け
23	女	中2~	友人との関係 ・学校の先生との関係 ・学習の問題 ・クラブや部活動での問題 ・分からない	病院・診療所	・適応教室等 ・進学の情報提供や相談	15歳(全日制)、中退→ 15~18歳(通信制)→ 18~21歳(専修学校)→ 16~22歳(パートやアルバイト)→ 以後、何もしていない	心の病のため	準引きこもり群	特になし
23	女	中3~	友人との関係	何も利用しなかった		15~19歳(パートやアルバイト)→ 以後、何もしていない	育児などのため学校や仕事を続けられそうにない		特になし
23	女	小4~	友人との関係	・公立の相談機関 ・保健所、保健センター	・学習指導	15歳(全日制)→ 16歳(全日制)→中退(通信制)→ 17歳(通信制)→ 18歳(通信制)→ 19歳(通信制)→ 21歳(以後、何もしていない)	心の病のため	引きこもり群	・進学に関する情報提供や相談 ・人間関係づくりのための手助け ・同世代の仲間との交流
23	女	小2~	分からない	・適応教室 ・公立の相談機関	・学習指導 ・仲間との交流	15歳(専修学校)→ 16歳(専修学校)→ 17歳(専修学校)→ 18歳(専修学校)→ 19歳(専修学校)→ 20歳(専修学校)→ 21歳(以後、何もしていない)	人間関係に自信がない	準引きこもり群	・就職に関する情報提供や相談 ・経済的援助に関する情報提供や相談 ・社会的・一般常識を身につける手助け ・人間関係づくりのための手助け
23	女	中1~	クラブや部活動 ・周りになじめない	民間施設	進学に関する情報提供や相談	15歳(全日制)中退→ 16~17歳(何もしていない)→ 18~23歳(リソーススクールとアルバイト)→ 現在何もしていない		準引きこもり群	・進学に関する情報提供や相談 ・自立して生活する手助け ・人間関係づくりのための手助け
24	女	中1~	いじめ ・友人との関係	・適応教室 ・民間機関	・心のケア ・適応教室等・生活習慣の指導	15歳(定時制)→ 16歳(定時制)→ 17歳(通信制)→ 18歳(通信制)(専修学校)→ 19~20歳(専修学校)→ 21歳(専修学校)(正社員)→ 22歳(正社員)→23歳以後、何もしていない	心の病のため	準引きこもり群	・心のケア
24	男	小6~	いじめ	・公立の相談機関 ・病院、診療所	・心のケア ・仲間との交流	15~18歳(専修学校)→ 18~22歳(四年制大学、中退)→ 以後、何もしていない	身体的な病気、けがのため	準引きこもり群	人間関係づくりのための手助け
25	女	中1~	いじめ	病院・診療所	・適応教室等 ・仲間との交流	15歳(定時制)→ 16歳(定時制)→ 17歳(定時制)→以後、何もしていない	学校や仕事が見つからなかった	準引きこもり群	・就職に関する情報提供や相談 ・自立して生活する手助け ・人間関係づくりのための手助け
26	女	中1~	いじめ	何も利用しなかった	・適応教室等 ・学習指導 ・進学の情報提供や相談	15歳(定時制)→ 16歳(定時制)(アルバイト)→ 17歳(定時制)(アルバイト)→ 18歳(短大)(アルバイト)→ 19歳(短大)(アルバイト)→ 20~21歳(正社員)→22歳(離職)→ 23歳以後、何もしていない	心の病のため	通常群	・経済的援助に関する情報提供や相談 ・人間関係づくりのための手助け ・同世代の仲間との交流
26	女	小4~	分からない	福祉機関 ・病院、診療所	・適応教室等 ・仲間との交流	16~18歳(全日制高校)→ 18~22歳(四年制大学)→ 22歳(正社員、退職)→ 23~26歳(パートやアルバイト)→ 以後、何もしていない	心の病のため	引きこもり群	・支援機関の紹介 ・同世代の仲間との交流
26	男	中2~	友人との関係 ・学習の問題 ・分からない	病院・診療所	学習指導	15歳以後、何もしていない	心の病のため	準引きこもり群	・学習の手助け ・技術や技能の習得の手助け ・社会的・一般常識を身につける手助け ・人間関係づくりのための手助け
26	男	中1~		何も利用しなかった	・心のケア ・施設や関係機関の紹介 ・進学の情報提供や相談	15歳(全日制)→中退→ 16歳(定時制)→ 18歳(通信制)→ 19歳(通信制)→ 21歳(パートやアルバイト)→ 22歳(パート)→仕事を辞めた→ 以後、何もしていない	人間関係に自信がない	準引きこもり群	・支援機関の紹介 ・就職に関する情報提供や相談 ・自立して生活する手助け ・技術や技能の習得の手助け

これからの生活において必要とする支援については、図37にあるように、最も多いものは、「人間関係づくりを身につけるための手助け」であり、「自立して生活するための手助け」が次に続いている。

表7にある履歴を見ても、卒業後から就学も就労もしていない者が3人、パートやアルバイトに従事したものの、15歳あるいは19歳から何もしていない者が2人、就学はしたものの17・18歳から何もしていない者が6人を数え、合計11人の者が、すでに十代において、何もしていない状況

にある。そして、この11人のほとんどが「準ひきこもり群」に属している。

こうした状況からも、これからの生活において必要とする支援として、「人間関係づくりを身につけるための手助け」や「自立して生活するための手助け」が挙がってくることはよく分かる結果である。

中学校を卒業して何もしていない者が、当時、具体的にどのような状況であったのか、支援を求めようとしたのか、どのような支援を望んでいたのか等を明らかにすることにより、中学校卒業後の支援の在り方が具体的に見えてくるのではないかとと言える。

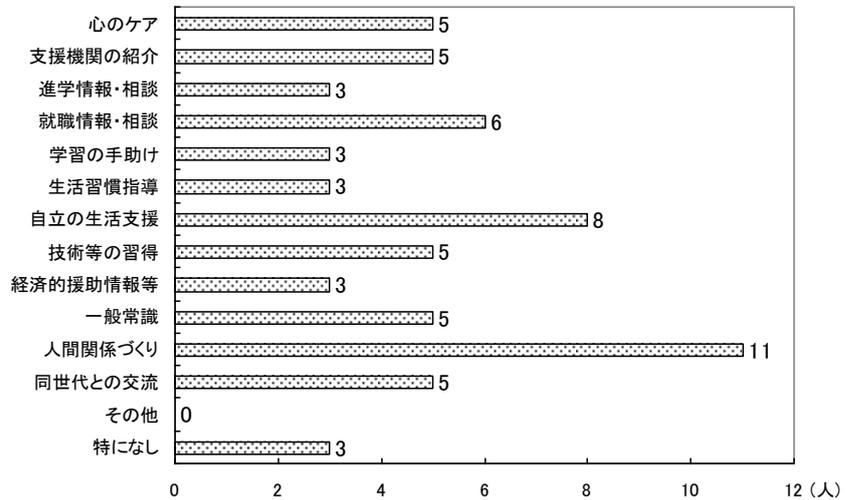


図 37 これからの生活に必要なとする支援(n=23)

※ 現在何もしていない者

## 5 登校できなかつた時期における学校での相談について

全体としては、登校できなかつた時期の学校での「相談」の有無をみると、「はい」が37.8%、「いいえ」が61.2%であり、男女ともに約6割の人が相談できなかつたと回答している(図38~40)。

また、現在何もしていない者を抽出した結果においては、「いいえ」が全体を上回り(65.2%)、特に、現在何もしていない女性の回答を見ると、「いいえ」の割合が女性全体としてのそれを大きく上回る結果(72.2%)となっている(図41~43)。

こうしたことは、実際に「相談」の機会がなかつたからなのか、家庭訪問や別室等で「相談」の機会があつたものの、本人がそれを「相談」として受け止めていないことによるものなのかは明らかではないが、いずれにせよ、話す際の姿勢や、支援として何を望んでいるのかというニーズの把握に基づく相談内容、相談体制等について工夫を図り、児童生徒の心に届くかわりを継続する必要があると言える。そのためにも、本人が甘えられたり、素直に話せたりすることができるような関係づくりが望ましいと言える。当所を利用する児童生徒の様子を見ても、甘えられる関係が信頼関係につながる事例も多く、当所としても、そうした関係をまず築いてから、受容と指導のバランスを図ろうとしている。

また、相談相手としては、図44にあるように、「担任」、「『別室』担当の先生、担任以外の先生」、「スクールカウンセラーまたは相談員」が多く、いずれも25.9%を占める。

男女別でみると(図45・46)、男性は「担任」が31.0%で最も多く、女性は「『別室』担当の先生、担任以外の先生」、「スクールカウンセラーまたは相談員」が27.0%で最も多かつた。

児童生徒にとって身近な存在である担任を中心に、その他の教職員やSC等、本人のリソースとして機能する人材を多様に活用し、対応の連携を図る校内相談体制の充実が求められている。

特に、前述したような「心の病」等の心因性の要因を抱える場合や、福祉的な対応を必要とする場合等、必要に応じて専門機関との具体的な連携を図るための保護者との話し合いも、「相談」の大きな役割であると言える。

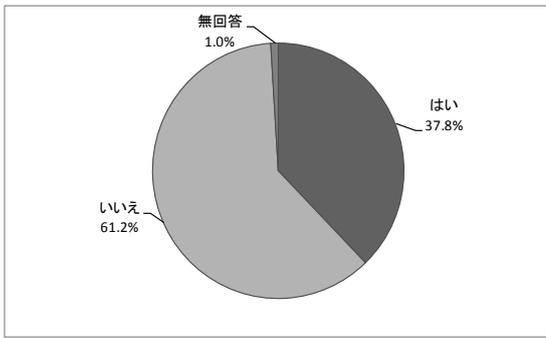


図 38 回答者すべて (n=209)

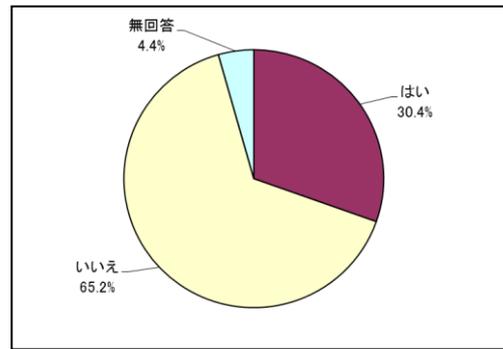


図 41 現在何もしていない者 (n=23)

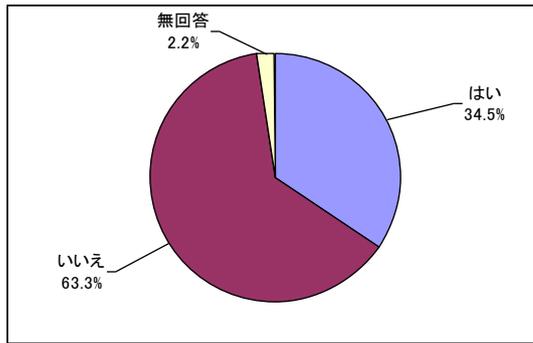


図 39 回答者 (男性) (n=90)

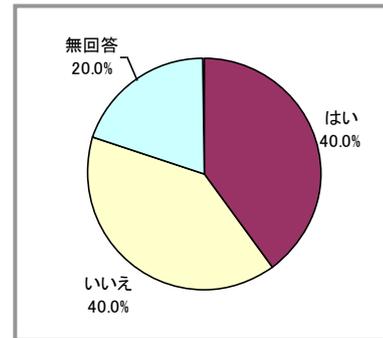


図 42 現在何もしていない者 (男性) (n=5)

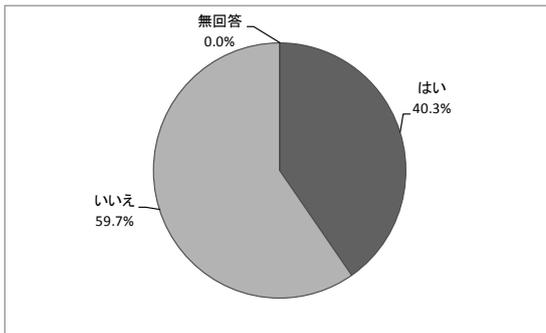


図 40 回答者 (女性) (n=119)

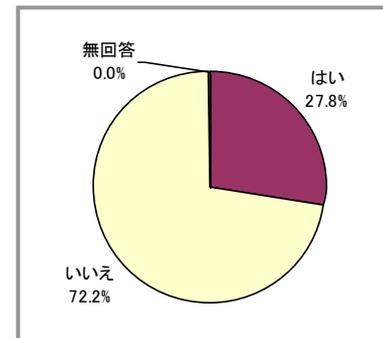


図 43 現在何もしていない者 (女性) (n=18)

〈登校できなかった時期の学校での「相談」の有無について〉

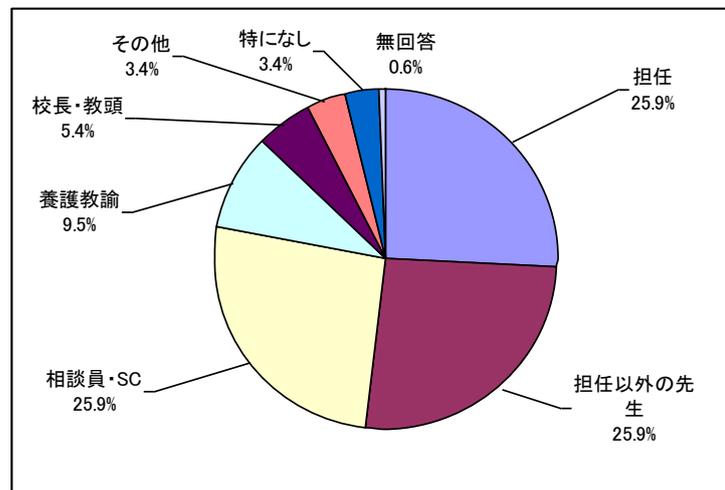


図 44 登校できなかった時に誰に相談したか (n=79)

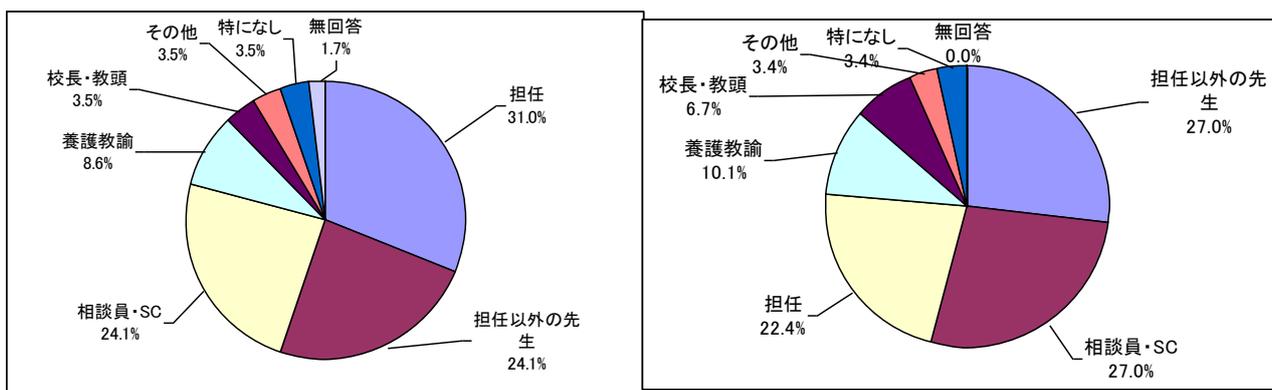


図 45 登校できなかった時に誰に相談したか(男性) (n=31) 図 46 登校できなかった時に誰に相談したか(女性) (n=48)

## 6 登校できなかった時期の学習の支援について

図 47 から分かるように、「学校における別室(保健室を含む)」「塾」「家庭教師」「民間施設」「その他」で学習の補充をしていた者は、70.6%を占めている。特に、「学校における別室(保健室を含む)」の割合は30.2%と最も高く、このことは、男女別にみても同様の結果であった。学校の取組の状況が分かるとともに、その運営の充実が求められるところである。

一方で、学習の補充について「何もしていない」が27.9%を占めることも看過できない結果となった。登校できなかったときに「学習指導」を必要としたことと、これからの生活において「学習の手助け」を必要とすることとの間にも関連性も見られるからである(表8)。

残差分析の結果から、登校できない時に学習指導を必要とした者は、学習指導を必要としていなかった者よりも、現在においても学習の手助けを必要としている傾向が見られた。逆に、当時、学習指導を必要としていなかった者は、学習指導を必要とした者よりも、現在においても学習の手助けを必要としない傾向が見られた。すなわち、当時に学習指導を必要としたと回答した者は、学習の手助けを現在も求めている者が多く、学習支援を必要としていなかった者は、学習の手助けを現在も必要としない者が多いことが分かった。

ただ、当所を利用している児童生徒からは、学習意欲があっても、「学習の仕方が分からない」「その段階から学習内容を積み上げたらいいのかわからない」「今さら、こんな内容について質問できない」等の話をよく聞く。当所の利用を通じて、人間関係の構築に自信を高め、別室や保健室登校等に向かう児童生徒も多いが、学習が身に付いていないことの不安により授業への参加が難しい実状も見られる。

興味深い結果としては、表9からも分かるように、当時に学習指導を必要としたことと性差との間に関連性が見られ、女性の方が男性よりも学習支援を当時必要としていたことである。このことは、現在当所を利用している児童生徒が「やまびこタイム」で学習に取り組んでいる様子からも同じ傾向が見られる。但し、現在もなお、学習支援の手助けを必要としていることと性差との間には関連性が見られなかった。

当時に学習指導を必要としたと回答した者は、現在も学習の手助けを求めている者が多いという結果を踏まえても、学校における別室等での学習指導だけでなく、必要に応じて塾や家庭教師等により学習の補充をしたり、学習内容の定着に向けた見通しを本人と供給した上で学習意欲を高めたりするなど、学習の補充に関する支援の在り方は大きな課題となるものと考えられる。

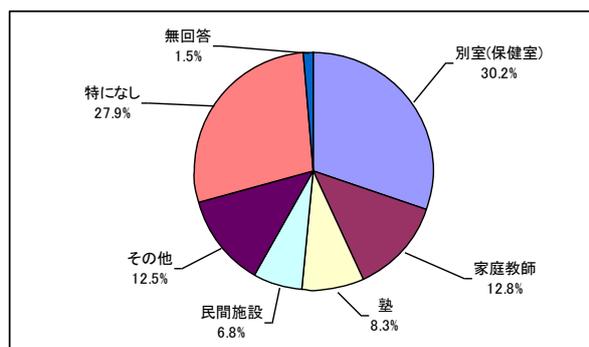


図 47 登校できなかった等の時の学習補充について (n=209)

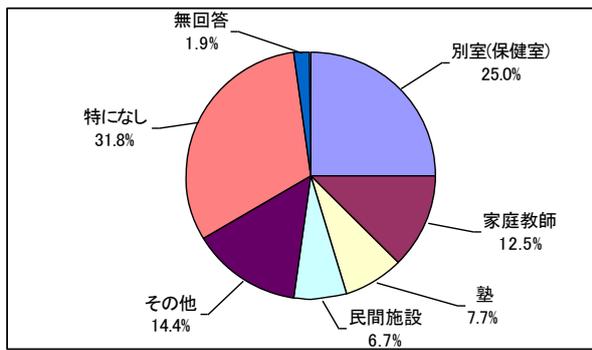


図 48 登校できなかった等の時の学習補充について(男子) (n=90)

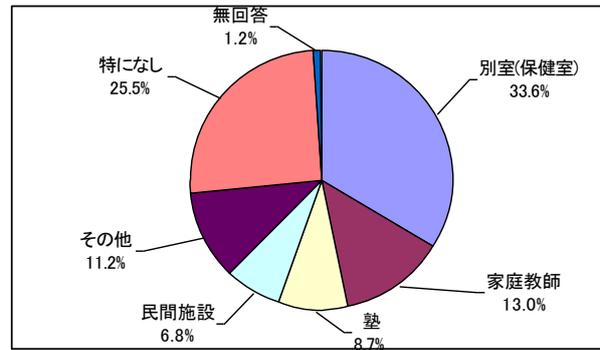


図 49 登校できなかった等の時の学習補充について(女子) (n=119)

表 8 「登校できなかった時期に必要なとした支援」と「これからの生活において必要な支援」との関連性 (n=205)

質問項目	内容	χ <sup>2</sup> 値	自由度	検定結果	CramerのV係数	選択項目	調整済み残差	
							必要だと思う	必要だと思わない
登校できなかったときに必要と思った支援	「学習指導」	5.444	1	*	0.163	必要であった	2.3	-2.3
						必要でなかった	-2.3	2.3

\*\*\*: p<0.001, \*\*: p<0.01, \*: p<0.05

表 9 「性差」と「登校できなかったときに必要とした支援」との関連性 (n=205)

質問項目	内容	χ <sup>2</sup> 値	自由度	検定結果	CramerのV係数	選択項目	調整済み残差	
							男性	女性
登校できなかったときに必要と思った支援	「学習指導」	10.462	1	***	0.226	必要であった	-3.2	3.2
						必要でなかった	3.2	-3.2

\*\*\*: p<0.001, \*\*: p<0.01, \*: p<0.05

## 7 登校できなかった時期に必要なとした支援について

「カウンセリングや相談を通した心のケア」が 18.4%と最も多く、このことは、前述した「登校できなかった時期における学校での相談相手の有無」の結果と連動していると考えられ、児童生徒の状況に応じた「相談」を専門的・継続的に図ることが求められていると言える。

続いて、ほぼ同率で大きな割合を占めているものとして、「学習指導」「適応教室など継続的に通えるような施設や関係機関の紹介」「仲間との交流」がある。現在何もしていない者を抽出した結果(図 53)においても、「適応教室など、継続的に通えるような施設や関係機関の紹介」が 23.4%、「学習指導」が 19.1%と上位を占めている。

「学習指導」については前述の通りであるが、「適応教室など継続的に通えるような施設や関係機関の紹介」「仲間との交流」を必要としたことについては、不登校の要因が、学校生活における人間関係に影響しているのとらえられる。特に、適応教室については、日常的に通級でき、しかも同世代の児童生徒との交流が図れるとともに、学習にも取り組むことができ、その紹介を当時求めていたことは肯ける結果であろう。但し、紹介が実際あったとしても、通級できる状況に当時あったのかどうかについては、本調査では明らかにすることはできないが、見通しを持って保護者や本人に適応教室のよさについて具体的に伝え、通級を勧めることは、早期対応の重要な働きかけである。

また、適応教室通級の前段階として当所の利用を図ったり、適応教室の通級と当所の利用とを併用したりする中で、スモールステップで学校復帰に向かう事例も多く、当所利用のモデルプランとして教職員等に提示しているところである。同世代との交流を継続しながら、その子の課題に対応

し学校復帰を目指す方は、効果的な取組であると言えるからである。

今回のこの調査で興味深いのは、図 51・52 から分かるように、男女で必要とする支援が異なっていることである。男性は「カウンセリングや相談を通じた心のケア」が 18.9%と最も多く、女性は「学習指導」が 18.9%で最も多かった。支援をする際に、留意したいこととして参考となる視点であろう。

「就職に関する情報提供や相談」については、全体として 2.2%と最も少なく、男女別においても同様の結果であった。

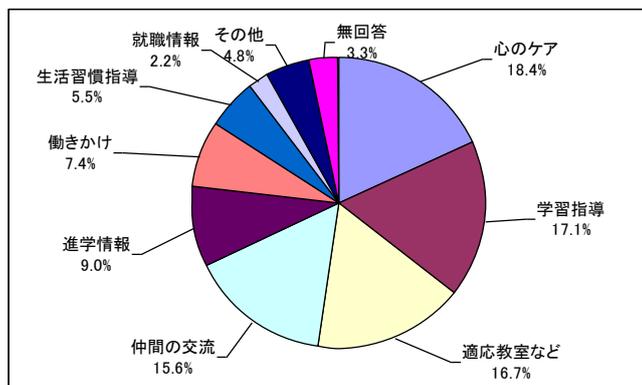


図 50 登校できなかった時に必要とした支援 (n=209)

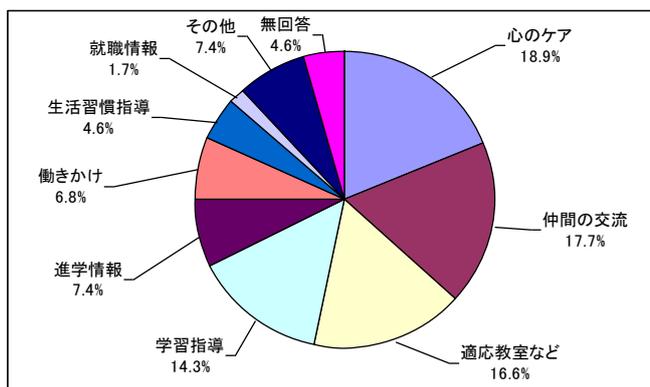


図 51 登校できなかった時に必要とした支援(男性) (n=90)

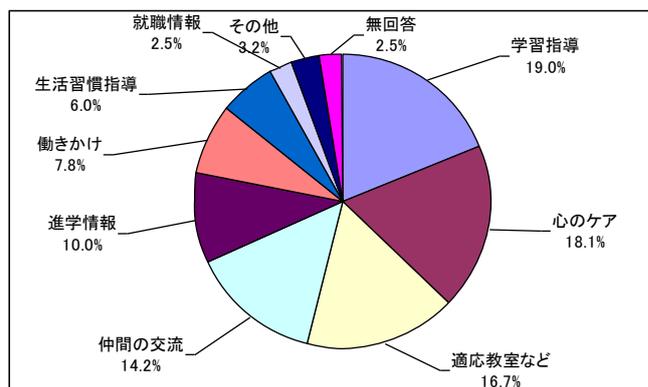


図 52 登校できなかった時に必要とした支援(女性) (n=119)

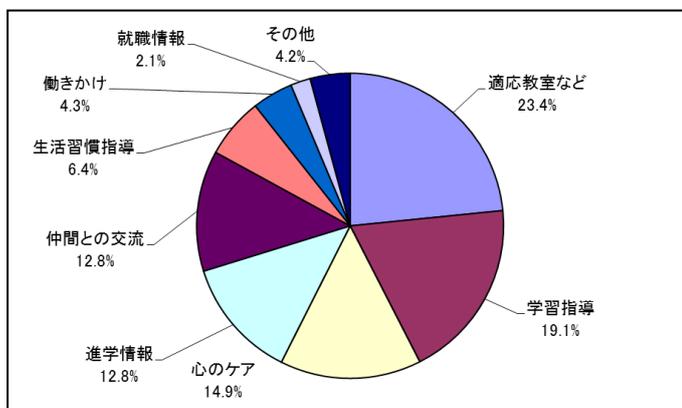


図 53 登校できなかった時に必要とした支援(現在何もしていない者) (n=23)

## 8 登校できるようになったきっかけについて

登校できるようになったきっかけについての自由記述の内容を、「かかわりを通して」「自分自身の気持ちの変化によるもの」「人間関係」「環境の変化」「その他」「無回答」の6つに分類した。また、「環境の変化」は、「進学」「その他」の2つに分けた。

「環境の変化」が91人で6項目のうち最も記述が多く、その中でも「進学先での生活」に関する内容が69人で一番多かった。「人間関係をゼロからスタートできたから」「心機一転できると思ったから」「もう一度リセットしてやり直せると思ったから」など、不登校になった要因である人間関係を一度払拭して、再スタートを切ろうとする意志を強く感じる記述などである。

次いで、「自分を認められるようになった」「目標ができた」といった「気持ちの変化によるもの」が75人、「友人の支え」や「学校の先生への対応の変化」等の「人間関係」が41人の順に多かった。また、進学先の学校別で記述を整理すると、共通する内容として「人間関係」について言及する内容や、それぞれの学校での環境について言及する内容が多かった。

こうしたことから、自分の気持ちの変化や、進学による環境の変化、新たな人間関係をきっかけとして学校復帰を果たしていることがよく分かる。

進学については、その意志を育むためにも、やはりそれに至る働きかけは不可欠であることが自由記述から読み取ることができる。例えば、「中学校の担任の先生からの勧めがあったから」「中学校の先生から不登校でも進学できる学校があると聞いたから」など、先生による働きかけについて言及する記述や、「やまびこの郷を利用し、自分に自信が持てたことで、進学を意識するようになったから」「心が丈夫になった（自信がついた）から」「やまびこの郷で出会った友だちが応援してくれたのと、フレンドリーサポーターと約束したから」といった当所の利用による気持ちの高まりに関する記述がそれにあたる。さらに、「夢を見つけたから」「将来の夢のため、自分のために変わらないといけないと思ったから」など、夢や将来を見据えて意を決した様子も読み取ることができた。

こうした記述から、進学にせよ、在籍校への学校復帰にせよ、どちらにしても自分にきちんと向き合ってくれる人のかかわりの積み重ねが必要であることが分かる。「先生が、毎日家まで迎えに来てくれたから、登校できるようになった」という記述などは、その必要性を最も顕著に示す内容であろう。

本人の気持ちへの柔軟な対応と、家庭や進学に伴う環境の変化等がうまくかみ合った時に、学校復帰への道筋が見えてくるのではないかと考えられる。また、このことは、かかわり続けた結果として生じることであると言える。

表 10 登校できるようになったきっかけ (n=196)

カテゴリー	内容	人数	合計
かかわりを通して	中学校の先生	15	28
	スクールカウンセラー	2	
	但馬やまびこの郷のスタッフ	10	
	いろいろな人	1	
自分自身の気持ちの変化によるもの	目標ができた	10	75
	自分を認められるようになった	1	
	進学への意欲の高まり	18	
	学習への意欲の高まり	2	
	大学進学・将来の焦り	2	
	自信等、自分の変化	15	
	過去への後悔	1	
	学校の必要性等、登校への意欲	7	
	新しい環境への期待	3	
	将来を考えて	5	
	けじめ	1	
	時間の経過により	3	
	暇だと思ったから	2	
	楽しい	5	
人間関係	友人が行くから	6	41
	メンタル面で支えられた	1	
	友人の支え	19	
	家族の支え	6	
	先輩の支え	1	
	周囲の人の支え	2	
	親の変化	2	
	家庭環境の変化	1	
	人間関係がよくなった	2	
居場所ができた	1		
環境の変化 進学先での生活	進学を節目として	15	91
	全日制高校	1	
	定時制高校	7	
	全寮制高校	13	
	通信制高校	4	
	岡山の高校	2	
	多部制単位制高校	1	
	夜間高校	1	
	フリースクール	1	
	中学校	3	
	不明(高校へ進学)	21	
その他	知っている人がいない	12	20
	進級により	1	
	学校が変わった	2	
	学校が変わった(特別支援学校)	1	
	毎日通わなくてよい	2	
	学校環境がよくなったから	3	
	学校の対応がよくなった	1	
	無回答	36	
その他	但馬やまびこの郷への参加により	1	36
	但馬やまびこの郷で友人ができた	1	
	清水ヶ丘学園の利用を通して	2	
	神出学園の利用を通して	1	
	適応指導教室の利用を通して	1	
	県立施設内の学校	1	
	不登校が行く人のスクールに通った	1	
	自分が動きやすい所にいた	1	
	病気が治った	1	
	高校の皆勤賞をもらうため	2	
	親に学費を払ってもらっているから	1	
	ルールが最小限だから	1	
	植木鉢に水をあげたくて	1	
	昼休みにサッカーをして過ごせるようになったから	1	
	なんとなく	2	
	きっかけ不明	2	
無回答	36		

表 11 各高校へ進学しての様子 (n=30)

カテゴリー	内容	人数	合計
定時制高校	夜間に通っている	1	
	仲間がいる	1	
	先生の対応がよい	2	
	楽しい	1	
	好きな授業を自分で組める	1	
	朝早く起きなくてよい	1	
	自分のペースでできる	1	
	無理な人間関係がいない	1	
仕事をしながら通える	1	10	
全寮制高校	学校が厳しい	1	
	自分の時間がある	1	
	親との距離	1	
	自分と気のあった人がいる	1	
	自由が多い	1	5
通信制高校	毎日学校に行かなくてよい	2	
	人間関係をリセットできる	1	
	新しい人間関係を期待している	1	4
岡山の高校	人間関係がよかった	1	1
多部制単位制	自由な学校のため	1	1
不明(高校)	先生との出会いがよかった	1	
	クラスになじめた	1	
	自分と同じような人がいる	2	
	人の目を気にしないで済む	1	
	人間関係が良好	1	
	自分の好きな道を進んだ	1	
	自分に合っている	1	
	1から始められる	2	10

表 12 登校できるようになったきっかけ (自由記述の主な内容)

年齢	性別	記述内容
24	女	通信制高校を選択し、人間関係をゼロからスタートできたから。
24	男	中学の同級生の人とは同じ学校に行きたくないのが最大の理由だったので、違う学校に行くことで問題はなくなった。
28	男	私をいじめていた子がいなくなり、心機一転できると思ったから。
17	女	知り合いが一人もない新しい環境だったので。
21	女	中学校からは全員が新たな環境なので、これを逃したら、また学校へ行けなくなると思って、勇気の一步を踏み出した。
27	男	自分に自信がついたから。
20	女	夢を見つけたから、それに向かって一直線でした。
25	女	目標ができたことにより、勉強の必要を感じ、自分のペースで学習する習慣ができた。
19	男	小学校から中学校へ進学する際に、ここで登校しなければ、もう行くことができなくなってしまうのではないかと考えたため。
15	女	心が丈夫になった。傷つく免疫ができた。
24	男	全くゼロからのスタートで(人間関係)高校に行けたから。行かなくなった学校に戻るのには絶対に無理だったけれど、違う学校でなら行けると思った。もう一度リセットしてやり直せると思った。
21	男	自分という存在が認められるようになり、自信を持つことでこれから先を考えられることができたので。親にもものすごく迷惑をかけていたことに気付いた。
22	男	高校入学を期に、ちゃんと学校に行こうと決心した。将来のことを考えてこのままではだめだと思った。
24	男	高校進学を志望し、中学三年の成績表が必要になったから。
23	女	先生が毎日家まで迎えに来てくれて、登校できるようになった。
18	男	中学校の担任の先生の勧めがあったからです。自分でも進学したいと思うようになった。
20	男	進路を決めるとき、中学校の先生から、不登校でも進学できる学校があると聞いて、自分を変えたいと思ったから。

25	男	学校へ行くようになってから、まず同じ境遇の同級生だけの特別教室で勉強のプランクを埋めてから、クラスに復帰できるようになった。
22	女	家庭教師の先生に「勉強しても、今学校に行っていなかったら、高校も行かれへんよ」と言われ、将来が不安になったから。
27	女	親に「高校だけは行って欲しい」と言われたから。
19	女	将来の夢のため、自分のために変わらないと、と思い友達と頑張る約束をしたこと。
18	女	同じ教室に通っていた友人と一緒に学校に行くようになり、自分の進みたい進路を見つけることができたからです。
26	女	信用できる友達がいたから。
26	男	将来について真剣に考えるようになったのと、友達が応援してくれたのと、フレンドリーサポーターの方と約束をしたからです。
19	女	やまびこの郷を利用し、自分に自信が持てたことで、進学を意識するようになり、頑張ってみようと思えたから。
16	女	寮生活を選んだから。(やまびこの郷での日々を思い出して)

## 9 中学校を卒業した頃と比べて、現在の自分が成長した点について

全体として、「人とうまく付き合えるようになった」が109人で最も多く、男女別にみても同様の結果であった(図54)。このことは、前述の「学校を休み始めたきっかけ」とも関連していると考えられる。つまり、中学校を卒業後の様々な人間関係の中での経験を通して、コミュニケーションスキルやソーシャルスキル等が身に付き、人間関係の広がりとともに生活空間も広がり、ゆとりが生じたことにより、当時よりもよくなったという自己評価がこの結果となっていると考えられる。

こうした成長も、不登校時に学校をはじめ、適応教室や当所等からの様々ななかかわりを通して培われた「人とかかわりたい」という思いがあつてこそ果たせることであり、いかに柔軟かつ継続的ななかかわりが必要であるかが分かる。

次に多かったのは、「自分で働いて収入を得ようとするようになった」で85人あり、さらに「生活のリズムがつくれるようになった」「自分の気持ちや意志をはっきりと表現できるようになった」「身の回りのことを自分でできるようになった」もほぼ同じ数で続いている。男女別で見ると、男性では「生活のリズムがつくれるようになった」が37人あり、女性は「自分で働いて収入を得ようとするようになった」が54人あり、男女により2番目が異なる結果となっている。

「自分で働いて収入を得ようとするようになった」という回答については、就労への意欲や実際の就労が、安定した生活のリズムを維持させるとともに、身の回りのことを自分で行う自己管理や、職場での自己表現が必要とされる環境下に置かれたことによるものととらえられる。そうした環境下で自己を見つめることにより、自信が生まれ、将来への希望につながっていることをこの結果から読み取ることができる。

また、「かっとしたり、いらいらしたりしないこと」と「いつまでもくよくよ悩まないこと」とを「感情の調整」として1つにまとめると、全体として2番目となる回答数となり、様々な人間関係の中での経験や働くことによる自立がもたらす変容は大きなものがあると言える。

「家族との良い関係をもつこと」についても、以上のようなことと関係していると考えられる。すなわち、就労に伴う生活リズムの安定、感情の調整、自己表現、自立にむけた積極的な孤独等が、家族との良好な関係を保つことと結びついていると言える。

その意味でも、不登校の時期に、他の児童生徒にかかわることを通して社会性を育む教育活動は重要であると言える。

現在の外出状況と中学校を卒業した頃と比較して自分が成長した点との間の関連性を見てもそのことが分かる(表13)。

「身の回りのことを自分でできるようになった」「生活のリズムがつくれるようになった」「働い

て収入を得ようとするようになった」「人とうまく付き合えるようになった」「自分に自信が持てるようになった」「将来に希望が持てるようになった」「特になし」の7項目において関連性が見られた。

残差分析の結果から、「通常群」は7項目に回答した者が多く、逆に「準ひきこもり群」にはその7項目について「成長したと思わない」と回答した者が多かった。また、「通常群」には、中学校卒業から自分が成長したと思っている者が多く、「準ひきこもり群」と「ひきこもり群」は、成長したと思っていない者が多かった。

こうした結果からも、「人とうまく付き合えるようになった」や「働いて収入を得ようとするようになった」など自立心の芽生えや自分への自信など内面的な成長が現在の外出状況に影響していると考えられる。

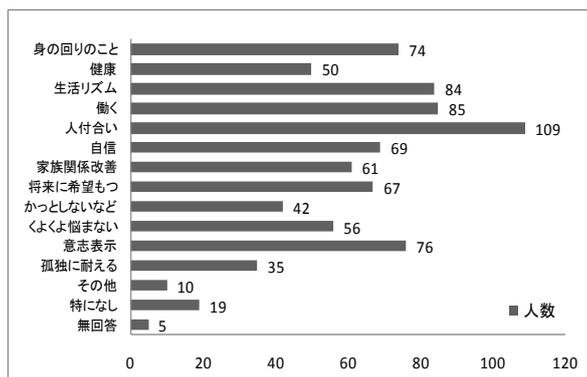


図 54 中学校を卒業後から成長したと思うこと (n=209)

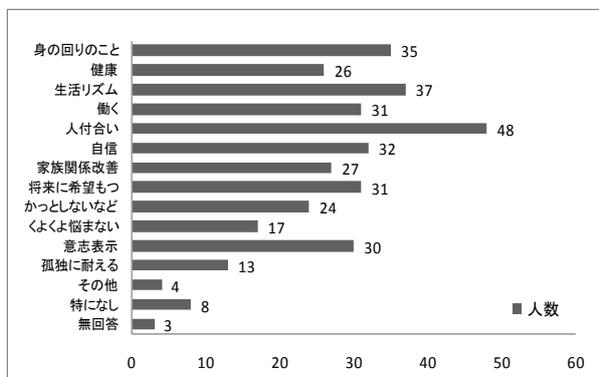


図 55 中学校を卒業後から成長したと思うこと (男性) (n=90)

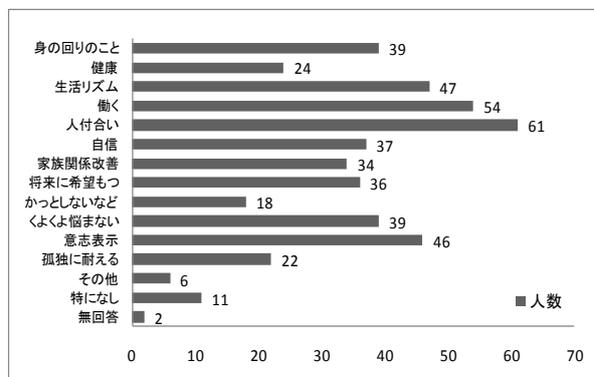


図 56 中学校を卒業後から成長したと思うこと (女性) (n=119)

表 13 普段の外出状況と中学校を卒業した頃と比較して自分が成長した点との関連性 (n=205)

質問項目	内容	χ <sup>2</sup> 値	自由度	検定結果	CramerのV係数	選択項目	調整済み残差		
							通常群	準ひきこもり	ひきこもり
中学校を卒業した頃と比べて現在の自分が成長した点	「身の回りのことを自分でできるようになった」	7.076	2	*	0.186	成長したと思う	2.6	-2.1	-1.5
						成長したと思わない	-2.6	2.1	1.5
	「生活のリズムがつくれるようになった」	15.871	2	***	0.278	成長したと思う	4.0	-3.5	-1.7
						成長したと思わない	-4.0	3.5	1.7
	「働いて収入を得ようとするようになった」	6.364	2	*	0.176	成長したと思う	2.5	-2.4	-0.7
						成長したと思わない	-2.5	2.4	0.7
	「人とうまく付き合えるようになった」	16.074	2	***	0.280	成長したと思う	3.9	-3.2	-2.2
						成長したと思わない	-3.9	3.2	2.2
	「自分に自信が持てるようになった」	10.191	2	**	0.223	成長したと思う	3.2	-2.8	-1.4
						成長したと思わない	-3.2	2.8	1.4
	「将来に希望が持てるようになった」	17.766	2	***	0.294	成長したと思う	4.2	-3.9	-1.4
						成長したと思わない	-4.2	3.9	1.4
	「特になし」	34.102	2	***	0.408	成長したと思う	4.9	-3.3	-4.6
						成長したと思わない	-4.9	3.3	4.6

\*\*\* : p<0.001, \*\* : p<0.01, \* : p<0.05

## 10 これからの自分にとって大切なこと

全体としては、「自分に自信を持つ」が106人で最も多く、男女別にみても同様の結果であった。

次に多かったのは、男性では「自分で働いて収入を得ること」「自分の気持ちや意思をはっきり表現すること」(どちらも37人)で、女性では「人とうまく付き合うこと」(63人)であった。

「自分自身に自信を持つこと」「人とうまく付き合うこと」「自分で働いて収入を得ること」「自分の気持ちや意志をはっきり表現すること」が上位を占めており、これらはすべて「自立」につながる回答であるととらえられる。

特に、「自分自身に自信を持つこと」「人とうまく付き合うこと」「自分の気持ちや意志をはっきり表現すること」は、現在、当所を利用している児童生徒の抱える課題としてもあてはまることであり、自己有用感を高めたり、コミュニケーションスキルやソーシャルスキルを身につけさせたりする活動がやはり必要であることが分かる。この点においても、当所の活動は有効であると考えられる。

また、現在の外出状況と「自分で働いて収入を得ること」「孤独に耐えられること」の2項目との間で関連性が見られた(表14)。

残差分析の結果から、「準ひきこもり群」においては、「自分で収入を得ること」を大切なこととして選んだ者が多く、「通常群」においては、その項目を選ばなかった者が多かった。また、「孤独に耐えられること」では、「通常群」においては、その項目を選んで回答した者が多く、「準ひきこもり群」においては、その項目を選ばない者が多かった。

「通常群」に「孤独に耐えること」を選んだ者が多いことは、興味深い結果である。「孤独」とは、いわゆる「積極的な孤独」を指し、内省したり、資格取得に向けた学習を進めたり、趣味に打ち込んだりするなど、あえて一人でいる時間を設け、一人でも過ごすことができるという心的安定を伴う孤独である。そうした状況において不安を生じたとしてもその不安を払拭しようと耐える試みは、自立に向かうエネルギーとしてとらえることができる。

「かっとなしたり、いらいらしたりしないこと」の項目と性差との間にも関連性がみられた(表15)。残差分析の結果から、女性にその項目を選んだ者が多く、男性にその項目を選ばなかった者が多かった。

「孤独に耐えられること」「かっとなしたり、いらいらしたりしないこと」を大切だとする状況が具体的にどのような状況を指しているのかを明らかにすることは、今後の新たな支援を工夫する上で役立つ資料となるのではないかと考える。

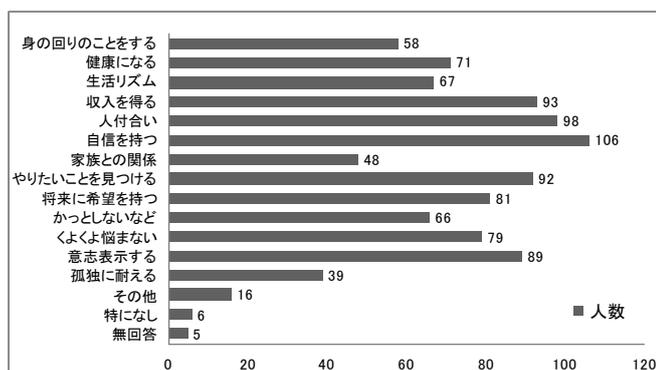


図 57 これからの自分に大切なこと (n=209)

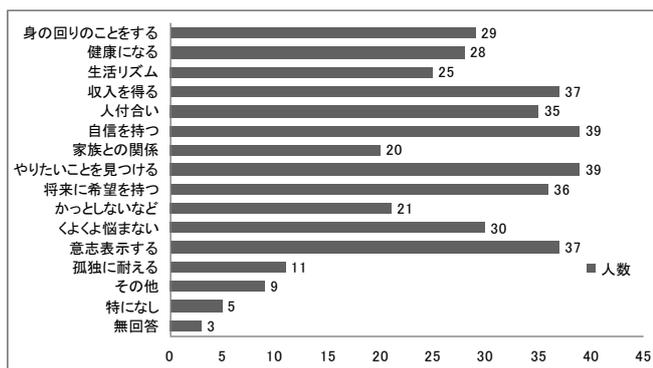


図 58 これからの自分に大切なこと(男性) (n=90)

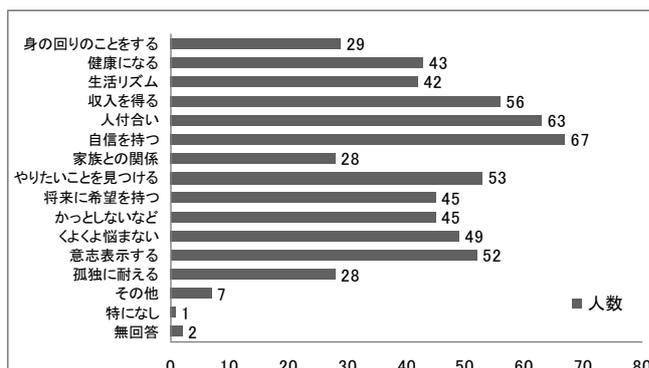


図 59 これからの自分に大切なこと(女性) (n=119)

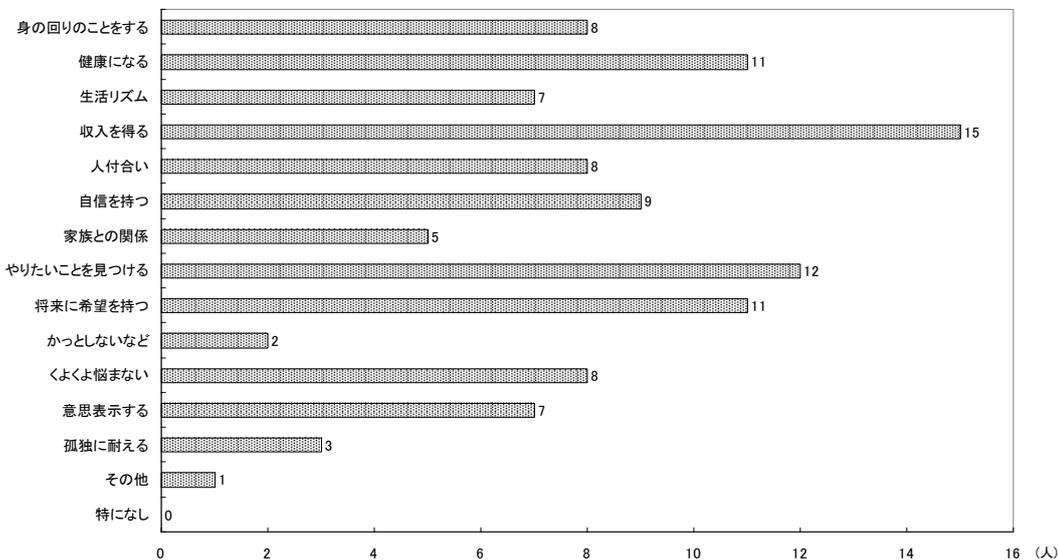


図 60 これからの自分に大切なこと  
(現在何もしていない者) (n=23)

表 14 普段の外出状況とこれからの自分に大切なこととの関連性 (n=205)

質問項目	内容	χ <sup>2</sup> 値	自由度	検定結果	CramerのV係数	選択項目	調整済み残差		
							通常群	準ひきこもり	ひきこもり
これからの自分に大切なこと	「自分で働いて収入を得ること」	6.269	2	*	0.175	大切だと思う	-2.5	2.1	1.2
						大切だと思わない	2.5	-2.1	-1.2
	「孤独に耐えられること」	6.247	2	*	0.175	大切だと思う	2.3	-2.5	0.3
						大切だと思わない	-2.3	2.5	-0.3

\*\*\* : p<0.001, \*\* : p<0.01, \* : p<0.05

表 15 性差とこれからの自分にとって大切なこととの関連性 (n=205)

質問項目	内容	χ <sup>2</sup> 値	自由度	検定結果	CramerのV係数	選択項目	調整済み残差	
							男性	女性
これからの自分に大切なこと	「かっとなしたり、いらいらしたたりしないこと」	4.104	1	*	0.141	大切である	-2.0	2.0
						大切ではない	2.0	-2.0
							*** : p<0.001, ** : p<0.01, * : p<0.05	

## 11 これからの生活において必要な支援について

全体としては、「人間関係づくりを身につけるための手助け」が65人で最も多く、次いで「同世代の仲間との交流」「学習の手助け」が多い結果となっている。

男女別では、男性は「特になし」が28人で最も多く、女性は「人間関係づくりを身につけるための手助け」が44人で最も多かった。「その他」と「無回答」を除いたうち、男性は「経済的援助に関する情報提供や相談」が8人で回答が最も少なく、女性は「規則正しい生活習慣の指導」が11人で最も少なかった。

また、現在何もしていない者を抽出して調べてみると、「人間関係づくりを身につけるための手助け」が最も多いことは同じであったが、次いで必要な支援として、「自立して生活するための手助け」が次に続く結果となっている。

「カウンセリングや相談を通しての心のケア」「人間関係づくりを身につけるための手助け」「特になし」の3項目において、性差との関連が見られた(表16)。残差分析の結果から、この3項目すべてに対して「必要である」と回答した者は、男性よりも女性が多かった。これからの自分に大切なこととして、「かっとなしたり、いらいらしたたりしないこと」を選ぶ女性が多かったことは前述のとおりである。そのことと「カウンセリングや相談を通しての心のケア」「人間関係づくりを身につけるための手助け」との間に何らかの関係があるのではないかと考えられるが、今回の結果からは明らかにすることができなかった。ただ、女性が、人間関係を良好に保つために何らかのスキルの必要性を感じながらも、まず自分自身の心の安定を図ることが大切であるという問題意識を持っていることをこの結果からとらえることができる。

「同世代の仲間との交流」を求める回答も目立つ。このことから、現在においても、コミュニケーションスキルや同世代との交流を求めている状況を読み取ることができる。

また、「学習の手助け」や「技術や技能の習得についての手助け」「社会的一般常識を身につけるための手助け」を求めていることについては、就労や資格取得等、社会的自立に向けた実務能力を高めたいという強い思いをとらえることができる。

「進学に関する情報提供や相談」「経済的援助に関する情報提供や相談」が多い結果となることを予想していたが、以上のような結果から、単に受け身として支援を求めているのではなく、豊かな人間関係を築きながら自立して生活をしていきたいという姿勢を見て取ることができる。

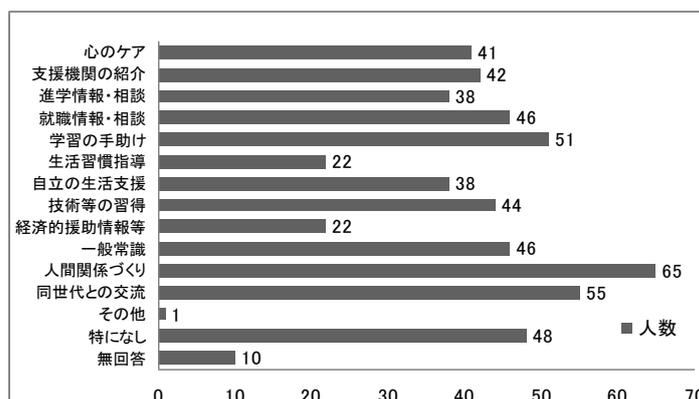


図 61 これからの生活に必要な支援 (n=209)

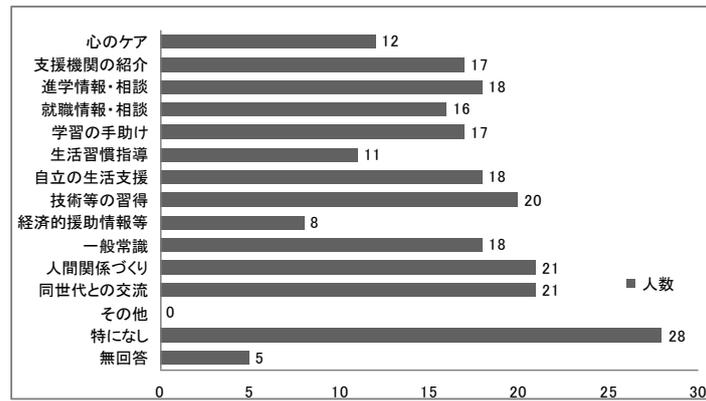


図 62 これからの生活に必要な支援 (男性) (n=90)

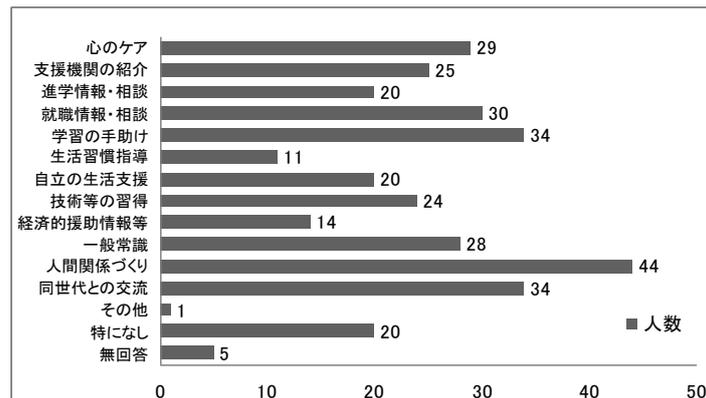


図 63 これからの生活に必要な支援 (女性) (n=119)

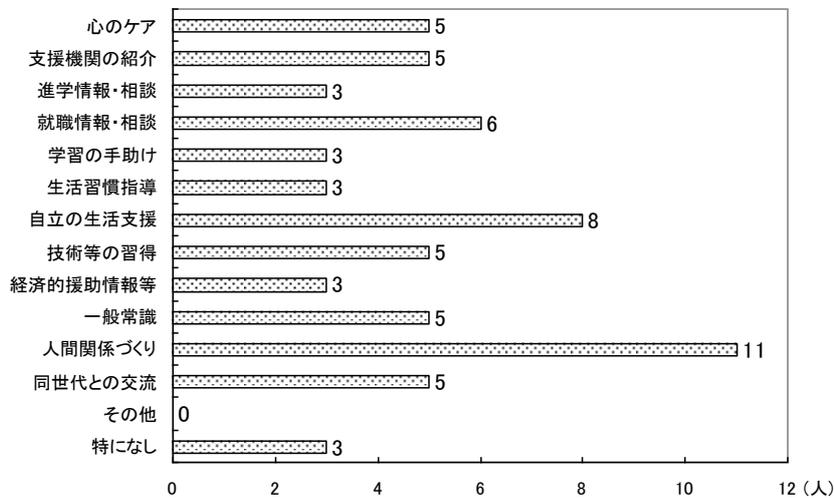


図 64 これからの生活に必要な支援  
(現在何もしていない者) (n=23)

表 16 性差とこれからの生活において必要な支援との関連性 (n=205)

質問項目	内容	X <sup>2</sup> 値	自由度	検定結果	CramerのV係数	選択項目	調整済み残差	
							男性	女性
これからの生活において必要な支援	「カウンセリングや相談を通じた心のケア」	4.262	1	*	0.144	必要あり	-2.1	2.1
						必要なし	2.1	-2.1
	「人間関係づくりを身につけるための手助け」	7.180	1	**	0.187	必要あり	-2.7	2.7
						必要なし	2.7	-2.7
	「特になし」	9.888	1	**	0.220	必要あり	-3.1	3.1
						必要なし	3.1	-3.1
							*** : p<0.001, ** : p<0.01, * : p<0.05	